

言語生態学的アプローチに基づく新しいキャリア教育の提案——「4つの問い」で促される生態学的主体性の形成過程——

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 東北学院大学学術振興会 公開日: 2025-03-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 房, 賢嬉, 野々口, ちとせ, 岡崎, 眸 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000501

言語生態学的アプローチに基づく新しいキャリア教育の提案

「4 つの問い」で促される生態学的主体性の形成過程

Proposal for a New Career Education Based on a Linguistic Ecological Approach

The process of forming ecological agency prompted by the “four questions”

○房 賢 嬉* 野々口 ちとせ** 岡 崎 眸*
○Hyeonhee BANG Chitose NONOGUCHI Hitomi OKAZAKI

Abstract: The purpose of this study is to analyze practices based on the linguistic ecological approach and to propose a specific model for new career education. We qualitatively and quantitatively analyzed the students' answers to the “four questions” (1) questions about world recognition, (2) questions about standards of behavior, (3) questions about relationship building, and (4) questions about identity, as well as their reflections on the class, and described how the activities in the class promoted the formation of ecological agency.

キーワード: 生態学的主体性、自己との関連、持続可能な生き方、対話的問題提起学習、ロールレタリング

Keywords: Ecological Agency、Relevance、Dialogical Problem-Posing Learning、Role Lettering

1 はじめに

2024 年 11 月 7 日の欧州連合の気象情報機関「コペルニクス気候変動サービス」の発表によると、2024 年の世界平均気温が産業革命前に比べて 1.5 度以上高くなるという見通しで、極めて深刻な状況であることが示された[1]。21 世紀に入り、グローバル化の負の側面として、自然環境の破壊による気候変動や貧富の格差が先進国でも見られるようになり、欧米の Z 世代を中心とした気候正義を求める動きが日本にも及んできた。

このように変動が激しく予測困難な時代に向けて教育のあり方が検討されており、「どのように生きていくか」「生きるとはどういうことか」という根本的な問いが重要視されている[2]。このような事態を受け、OECD からは新しい教育改革の方向性が発表された。そのポジション・ペーパーには「若者を教育するのは働くための準備をすることだけが目的ではない。前向きで、責任ある行動をとることができる、積極的な社会参画ができる市民となって

いくためのスキルを付けなければならないのである。(中略) 将来に向けて準備ができている生徒は、自らの教育や生活全体を通して、エージェンシーを発揮していく必要がある。」[3] (p.95)と示されており、キーコンピテンシーのコアに市民性やエージェンシーが置かれていることが窺える[4]。

このような変化は、日本の学校教育において重視されてきた「生きる力」の捉え方にも反映されている。松尾ほかによると、2000 年代は社会の激しい変化にやや受身的に「対応する」ための力と捉えられ、2010 年代になるとこれまでの「生きる力」の理念を継承しつつ、基礎的・基本的知識・技能などの学力の面が強調されるようになったという[5]。そして、2020 年代に入ってからはいよいよ社会と幸福な人生を切り拓く力と捉えられるようになり、特に主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が求められている。具体的には、自己のキャリア形成の方向性と関連づけながら主体的な学びを実現するという視点が強調されており、これは一授

業で作り出すことは難しく、「人生型の主体的な学習」[6]を含んでいるという[5]。こうした教育改革が意味するのは、グローバル化による地球規模の激しい変化の下で自然や人類が危機に直面しており、このままでは持続不可能であること、持続可能な生き方を模索し主体的に現状を変革することが学習者に求められていること、そのためには生涯教育としての新しいキャリア教育の模索が必要であるということである。

以上を踏まえて、本稿では新しいキャリア教育の形として言語生態学的アプローチを提案し、それに基づいた実践による成果を述べる。以下では、OECD から出されたエージェンシー(agency)の概念について概観・再定義し、キャリア教育における言語生態学的アプローチについて述べていく。

2 先行研究

2.1 エージェンシー(agency): 行為主体性

1 で述べたとおり、グローバル化の加速化により、予測困難な時代を生きることになっている若者に、どのような教育が必要かについての議論が活発に行われ、改めて「生き方」に対する根本的な問いが重要視されている[2、5]。2019 年、OECD は「OECD ラーニング・コンパス 2030」という未来の教育の枠組みを発表した。ラーニング・コンパス(学びの羅針盤)とは、学習者が意味のある、責任意識を伴う方法で自分の進むべき方向を見出し、導いていく必要性を強調するために使われている比喩である[7]。

ラーニング・コンパスでは、「エージェンシー」が中心概念として新しく取り入れられており、以下のように定義されている。

The concept of student agency, as understood in the context of the OECD Learning Compass 2030, is rooted in the principle that students have the ability and the will to positively influence their own lives and the world around them. Student agency is thus defined as the capacity to set a goal, reflect and act responsibly to effect change. It is about acting rather than being acted upon; shaping rather than being shaped; and making responsible decisions and choices rather than accepting those determined by others. [7] (p.2)

学習者には学習者自身の生活や人生の well-

being だけでなく、世界の well-being を視野に入れ、いい影響を与える主体となることが期待されている。well-being とは、物質的な状況(雇用、収入、住宅)、生活の質(ワークライフバランス、安全、生活満足度、健康、市民活動、環境、教育、共同体)など、「よりよい暮らし指数」と関連が深い [8]。エージェンシーとは、自分と世界の well-being に向かって目標を設定し、振り返り、責任を持って行動することによって変革を起こす力である。これまでの学校教育においては、「グローバル社会を生き抜く」という目標からもわかるように、どちらかといえれば社会への適応、秩序や社会の規範を受け入れて生きることに関心が置かれた形で主体性が言及されてきた。一方、「OECD ラーニング・コンパス 2030」では、「他者によって決定されたものを受け入れるのではなく責任ある決定と選択をする(筆者訳)」[7]と述べており、学習者自らが主体になって社会の変革を起こすことに焦点化してエージェンシーを位置付けている[4]。このような変化について小玉は、グローバル化した世界の大きな変動に対する危機感から出てきたものと考察している[9]。

では、自分と世界の well-being に向かって社会の変革を起こす主体性とは具体的に何を意味するのだろうか。それを考察するために、まずエージェンシー(agency)の学術的な意味を吟味する。溝上[6]によると、「行為主体性」と訳されるエージェンシー(agency)は、「自己を起点とした行為、あるいは主体の対象(客体)に対する進んだ働きかけ、主体の対象(客体)に働きかける優位性を強調するときに用いられることが多い」という(下線は筆者による)[6]。そのため、OECD のエージェンシーの概念において、それがどのような対象に対しての主体の優位性を示しているかを明らかにする必要があると指摘している。

これに対するヒントが小玉 [4]のエージェンシーに関する考察に見られる。小玉はエージェンシー概念を変革主体の行為遂行性として位置付けたバトラー[10]を取り上げ、OECD のエージェンシーと比較しながら考察した。小玉によれば、バトラーは、エージェンシーが既存の構造、既存の制度的な体制の内部にあるものであること、そして予測不可能な逸脱、逸れの中から生み出されるものであり、制度の混乱やかく乱、そして変革する可能性があるものとしてとらえているという [4]。

現在、「不安定性」(プレカリティ)[10]を抱えた人々(難民や失業者、性的マイノリティー、宗教

的・人種的マイノリティなど)のみならず、一見「安定」した生活を送るように見える人でもグローバル化の変動により雇用や食糧などのライフラインが脅かされる可能性があるという点で、私たちは皆「不安定性」を抱えている。こうした不安定性を抱えた人々が連帯して行為遂行的な行動を起こし世界を変革する主体であり、そうした行為によって、既存の構造、既存の制度的な体制が再定義され、組み替えられるものになる可能性がある。

OECD とバトラーは、既存の制度や既存の内部に存在しながら「変革を起こす主体」を表す概念として共に「エージェンシー」を用いているが、その内実は少し異なる[4]。上述したように、バトラーは既存の社会のあり方や社会の制度を組みかえていく変革主体に重点を置いているのに対し、OECD の場合は、社会を再生産させていく変革主体に関心がある[4]。小玉はグローバリゼーションの加速によって変動に対する危機感がさらに大きくなれば、既存の社会の在り方や制度を組み替えていくためのエージェンシーの概念が組み込まれるようになるかもしれないと展望している。

以上を踏まえて考えると、自分と世界の *well-being* に向かって社会の変革を起こす「エージェンシー」は以下のように整理できる。

まず、一つ目に自己を起点とした行為、バトラーの言葉を借りて言えば、「不安定性」(プレカリティ)[10]を抱えた私たちが当事者として関わることである。私たちは「共有の世界—自分自身の生の見通しが他の全員のそれと常に結びついているような世界—」[10](p.60)で生きているため、世界の変動がもたらす危機は「不安定性」を抱えた学生自身にとって切実な問題であり、これから学生自身が対応していくべき動機づけでもある。バトラーは、自己は人間的動物として生の生物学的ネットワークとのつながりなしで生きることができず、エイジェンティック(行為能力のある)な生物として行動できるのも、生物界の文脈においてのみであると述べている[10]。

二つ目に、「主体の対象(客体)に対する進んだ働きかけ」についてである。「不安定性」を抱えている私たち(主体)は、グローバル化した社会の構造や制度的な体制(客体)の内部にありながらも、それに働きかけ、組み替えていく変革主体であると考えることができる。

一方、グローバル化の流れは巨大で、所与のものとして認識されやすく、主客関係を築くことが困

難であるという指摘もなされている[11]。それは、世界について考える基盤が乏しく、目の前に見えているものの関係やその全体をとらえる基盤が弱いため、「不安定性」を抱えている自分自身の姿が見えず、世界の変動がもたらす危機に主体として働きかけることが難しいからである。岡崎眸は、グローバル化によって生み出されている様々な現実を自己の生と関連づけて考えなければならぬと述べている[12]。また、岡崎敏雄は、自己と自己を取り巻く社会(環境)とのつながりを認識することで、世界を組み立てている言葉を獲得[13]しながら、そのつながりに不全がある場合はつながり方を変え、変革していくことで持続可能な生き方を模索する主体を生態学的主体性[14]と呼んでいる。この生態学的主体の形成こそがキャリア教育において目指されることだと考える。

2.2 キャリア教育における言語生態学的アプローチ

自己を取り巻くつながりのあり方を認識し、不全がある場合はつながり方を変革する生態学的主体性が必要であることを確認した。そしてこの生態学的主体性の追求を核としたアプローチが生態学的アプローチである。

生態学的アプローチでは、諸現象を孤立的に捉えないで、代わりに、相互につながり関連し合いながら一つのシステム(生態系)を構成していると考え。システムとは何か。京免[15]は Guichard を引用し、これから学生が生き方・キャリアを考えるに当たって、①個人間の能力差、②ディーセントワークの不足、③環境危機の深刻化という三つの問題が重要だという。①については、生物である人間もその能力は千差万別であり、同時に社会の中で生きている以上社会の影響を受け社会的資本も同じではない。銀のスプーンを持って生まれた子どももいれば社会的文化資本に全く恵まれない子どももいる。多様な能力を持った人々の集合体として学生の生きる社会を捉えることは前提である。次に、②ディーセントワークの不足は新自由主義の拡大によって作り出された事態であり、拡大の一途を辿っている。また、③環境危機の深刻化は、人口爆発、自然破壊、地球温暖化、貧困、格差拡大などとして人類の生存を脅かす地球規模の問題となっている。

こうした三つの問題は、生態学的アプローチでは、相互につながり、つながりの中で起きている現

象(問題)として捉える。しかしながら、そのつながりは不可視化され、あたかも個別に生起している問題であるかのように捉えられ、しかも、それらの問題に私たちがつながっていることも私たちには見えていない。私たちがその中にいるシステムがどうなっているかを知らずして、生き方を決めるとするなら、それは羅針盤なしに航海にでるようなものであろう。

このような認識の下に、生態学的アプローチでは、先に述べた生態学的主体の形成をキャリア教育の中心に据える。社会人としてのキャリアを始めようとする学生にとっても、あるいはキャリアを積み重ねてきた社会人にとっても、先に述べた三つの問題は立ち向かうべき問題として次々と現れてくるであろう。そんな時、自分が直面する問題の解決を目指し、自己と自己を取り巻く社会(環境)とのつながりを認識することで、世界を組み立てている言葉を獲得する。言い換えれば、想像力を駆使して現象間の関係性・つながりを辿ることで問題の全体像・構造を掴むことである。また、つながりの全体を掴もうとすれば、必ず、自分自身もそのつながりのどこかには位置づいていることに気づく。

このつながりの中にいる自分の位置をどう捉え、どう行動するか。そのままとどまるとすれば、例えば問題だと認識はしていても、問題解決に向けて一步を踏み出すことはしない、自分は何もしないことを意味する。つまり、問題状況の看過である。そこには、現実が変わりそうもない、現実は変えられないという判断があるだろう。現実を変えることに力を尽くすより、現実を肯定した上で、自分だけは問題の当事者にならないようにすり抜ける方策を追求する生き方・キャリアもあり得る。日本の現状をみると、この方が多いかもしれない。しかし、これでは当人のみならず日本社会ひいては人類の未来を危うくすることが危惧される。それほどまでに人類は産業革命以降の生産力増強により地球の物質循環を攪乱し、このままでは取り返しがつかなくなると警告されている。私もその一人である人類の持続可能性は地球の持続可能性なしには実現できないのである。

あるいは、問題解決に向けて自己を含めたつながり方をつなぎ変えることを追求するか。追求するとしたら、どのように紡ぎ変えるか。この追求こそが、自分の生き方でありキャリアであると言える。つまり、生態学的主体性の形成である。

生態学的主体性の形成を目指した教室実践に

は、野々口ほか[11]がある。野々口ほかは大学のリベラル・アーツ科目において、教師と学習者の教室談話テキストを言語生態学的に分析した。教師と学習者である主体がグローバル化の変動の下での生き方を追求する過程を分かち持ち、関わり合いながらそれぞれの生態学的主体性形成の契機を獲得していく様子が詳細に記述されている。野々口ほかでは、教師と学習者のやりとりをミクロに分析することで生態学的主体性の形成過程を記述しているが、授業中に行った様々な活動や学習者同士のやりとりなどが生態学的主体性をどのように促しているかについては明らかになっていない。

以下では、生態学的主体性の形成を目指して行った教室実践を分析し、学生が様々な活動を通してどのように生態学的主体性を形成していったかを記述していく。

3 研究目的と方法

3.1 研究目的

本研究は、言語生態学的アプローチに基づく実践を分析し、新しいキャリア教育の具体像を提案することを目的とする。

3.2 研究対象

本稿の分析対象は 2022 年に行われた教養教育科目の授業で、受講生は 80 名であった。この科目は、よく生きようとする態度を養成するための「人間的基礎教育」科目として開講されており、キャリア教育に特化したものではない。シラバスに記載している授業内容と達成目標は以下の通りである。

【授業内容(シラバスの記述)】

グローバル化の影響のもと、私たちを取り巻く世界は急激に変化しています。人類は環境、エネルギー、食糧、雇用、貧困など様々な問題に直面しています。こうした予測困難な時代において、「今をどう生きるか」は、私たちにとって切実な問題であり、そのような問いを問うのは言語を媒介とした活動(個人内・個人間コミュニケーション)によって可能になります。この授業では、コミュニケーションを通して今の地球社会をどう生きていくかを考えます。

【達成目標(シラバスの記述)】

自己を起点にして、世界はどうなっているか、グローバル化社会の人・モノ・コトと自分はどのようにつながって

表 1 シラバス及び授業内容

回	テーマ	授業内容
1	ガイダンス	私たちが生きている地球は、今どうなっているか。
2	グローバル社会を生きる私たち	自分の幸福論と溜めについて考える
3	グローバル時代に「働く」とは (1): 自己を起点に考える	(1) 自分の職業的価値観について考える (2) 先輩(進路選択)のライフストーリーを読み追体験をする。
4	グローバル時代に「働く」とは (2): 先輩の事例から考える(20代編)	進路選択に悩む先輩テキストを用いた対話的問題提起学習を行う
5	グローバル時代に「働く」とは (3): 先輩の事例から考える(20代編)	(1) 対話後の考察を共有し、自分や相手の価値観の類似点・相違点に気づく (2) 仕事における「目標」と「目的」の違い、「仕事の価値」について考える (3) 先輩(総合職)のライフストーリーを読み追体験し、対話的問題提起学習を行う
6	グローバル時代に「働く」とは (4): 先輩の事例から考える(30代編)	(1) 対話後の考察を共有し、対話的問題提起学習から見てきた先輩(総合職)を取り巻く環境、問題、解決するための選択肢を共有する。 (2) 「生きるための 4 つの問い」を共有 (3) 社会の変動と雇用 (4) 30 代の先輩のライフストーリー(『35 歳を救え』)を見て議論する
7	グローバリゼーションと食糧問題 (1)	(1) テキストの内容(新自由主義政策と経済のグローバル化)を 35 歳の登場人物の状況や学生の疑問と関連づけて考える (2) 私たちの食に何が起きているか考えるために、①自分の食生活を振り返り、ドキュメンタリー映画『フードインク』を視聴する。
8	グローバリゼーションと食糧問題 (2) 食糧問題の背後にあるものを捉える	(1) 対話的問題提起学習を行い、『フードインク』の中で何が起きているかについて理解を深める (2) グループで世界の変動、人・モノ・コト、リスクに注目してつながりの図を作成し、発表する。
9	グローバリゼーションと食糧問題 (3) 食糧問題の背後にあるものを捉える	(1) つながりの図を作成しながら浮かんでくる「自発する問い」に対する答えを調査し、グループで議論しながら、つながりの図を精緻化する (2) つながりの図を発表する
10	グローバリゼーションと食糧問題 (4) 食糧問題の背後にあるものを捉える	学生の振り返りの記述を引用しながらフードインクと同じ仕組み・リスクがあらゆるところで見られることを確認する(バナナプランテーション、コンビニ、技能実習制度、スウェットショップ、コーヒー農場、原発等)
11	グローバリゼーションと食糧問題 (5): 新自由主義、そして水	(1) アボカドに関する記事を読み、つながりの図を作成し、グループで共有する。 (2) なぜ「水」が問題となっているのか考えるために、水に関するドキュメンタリーを視聴し、対話的問題提起学習を行う。
12	地球規模で考えよう(1): コモンの資本化	(1) 水道民営化について調べる。 (2) ドキュメンタリー『最後の一滴までーヨーロッパの隠された水戦争』を視聴し、設問に沿って思考を深める。
13	地球規模で考えよう(2): コモンとしての地球	(1) コモンの資本化(水、公園、タネ)の問題について考える。 (2) 「生きるための 4 つの問い」を第 5 回目に作成したものと比較する。
14	私はどう生きていくか(1) 事例から考える	(1) 第 8 回で取り上げたドキュメンタリーに登場した人物(キャロル)がその後どのように生きているか想像するために「ロールレタリング」の活動を行う。 (2) キャロルのその後の映像を見て、生活の変化を振り返り「別の選択肢(オルタナティブな生き方)」を選ぶことによって人・モノ・コトのつながりの変化を確認する。 (3) オルタナティブな生き方の別の事例(『もくもくファーム』)を見て既存のシステムとは別のシステムを作る人々について考察する
15	私はどう生きていくか(2) 私が考える「持続可能な生き方」とは?	(1) オルタナティブな生き方の別の事例(新聞記事『“足る”を知る社会へー地産地消の電力が自治再生のカギ』)を読み、議論する。 (2) 平野さんのその後の映像を見て、生活の変化を振り返り「別の選択肢(オルタナティブな生き方)」を選ぶことによって人・モノ・コトのつながりの変化を確認する。 (3) 授業全体をまとめ、「生きるための 4 つの問い」を考える。

いるかを、言語を媒介とした活動を通して能動的に認識し、これからそれらとどのような関係を持ち、どのように生きていくかを考える授業です。この授業では以下のことを達成目標とします。

①言語が自己の思考を支え、他者との間をつなぐものとして機能していることを実感することができる。

②私たちを取り巻く世界を能動的に認識し、地球社会を持続可能に生きるための自分なりの枠組みを作る

ことができる。

15 回の授業内容のシラバスを表 1 に示す。具体的には、人の生存のためのライフラインを成す「雇用」(第 2 回～第 6 回)と「食糧」(第 7 回～第 13 回)を軸に、環境、エネルギー、貧困、格差などの問題からグローバル化と新自由主義的な資本主義の仕組みを把握し、その中でどう生きるかを考える(第 14 回～第 15 回)という流れになっている。

授業を行うにあたって次の二点を重視した。第一に、自己を起点としてつながりを見て、自分との関連を考えることができるように促した点である。現在の学部生にとって、外から与えられる知識や情報を自分のこととして考える機会ほとんど与えられておらず、その中で何を拠り所にしてどのように生きるかを改めて問い直す機会も多くないと考えられる。そのため、本授業では「4 つの問い」[13]に基づき、学生が自己を起点にして世界を能動的に認識し、そこでどのように生きるかを問い直す機会を 3 回設けた。バトラー[10]が指摘しているように、私たちは自分自身の生の見通しが他の全員のそれと常に結びついているような世界(共有の世界)で生きている。しかし、想像力の縮退により、様々な事象やモノ、人の間のつながりを相互に関連づけてとらえ、「自己を含む世界の相互依存性」の全体像をとらえることが難しくなっている[13]。こうした世界の見方は、生き方、人間関係観、自己のアイデンティティーの問題と密接に繋がっているため、縮退している想像力を甦らせるための言葉の保全・育成を目指した。具体的には、①「世界はどうなっているか」(世界認識に関する問い)、②「その中でどちらに向かって歩いていくか」(行動基準に関する問い)、③「他の人とどんな関係を作っていくか」(人間関係構築に関する問い)、④「自分とは何か」(アイデンティティに関する問い)という「4 つの問い」を活動の節目(第 5 回目、第 12 回目、最終回)に言語化してもらった。第二に、世界を能動的に認識しどのように生きていくかを考えるために、一方向的な知識・情報伝達だけでなく、言語を媒介とした様々な活動を取り入れ、自己内対話及び他者との対話を促した点である。

3.3 研究課題

上記の授業とその受講生を対象に、以下の研究課題を設定する。

研究課題:先輩テキストやつながりの図、キーワ

ードプロジェクト、ロールレタリングといった活動と「4 つの問い」は、受講生の生態学的主体性の形成をどのように促しているか。

3.4 分析方法

上記の研究課題を明らかにするため、本研究では以下の 2 つの方法で分析する。まず、1 名の学習者(以下 A さん)に焦点を当て、授業で行った各活動における A の生態学的主体性の形成を「4 つの問い」の分析から質的に探る。次に、受講生が各活動を通して、世界を組み立てているどのような言葉をどのように獲得していくかを量的に探る。計量テキスト分析のためのフリー・ソフトウェア KH Corder [16]を用いて、全受講生の第 5 回授業での「4 つの問い」の回答と、最終レポートでの「4 つの問い」の回答をテキストマイニングで分析し、名詞の共起ネットワークの異同を見る。

4 結果と考察

4.1 「4 つの問い」から浮かび上がってくる生態学的主体性形成に向かう A の追求

この節では授業で取り上げた主な授業活動を紹介しながら、その活動を通して A がどのように生態学的主体性を形成していったか、A の認識の変化から記述していく。持続可能な生き方を追求するための一つの手がかりとして、一番基礎的なものは自分にとって「何が幸福であるか」、「何がリスクであるか」を考えることがあげられる[13]。それらを自覚的にとらえなければ、変動が激しい世界を能動的に認識し、それと突き合わせて自分リスクや幸福の形を変えていくことができないからである。そこで、まず「私の幸福論」を言語化することからスタートした。以下は A さんの幸福論である。

私が幸せを感じるのは、考えなくてはならない、憂慮しなくてはならない事柄を考える必要が無い状態で自分の楽しみだけを追い求めるときである。私にとっての幸せとは安心である。だから、悩む必要が無い時が幸せを感じられるときになる。例えば、他人に自分を肯定された、認められる時が安心でき幸せを感じる。なぜなら、自分の存在を容認され悩む必要がなくなるからである。けれど、幸せを感じるときはある意味現実逃避をしている時とも言えてしまう。私の幸せである安心は現実逃避と紙一重といえるのかもしれない。(A さんの幸福論)

A さんは幸福を「安心」している状態、つまり「考

えなくてはならない、憂慮しなくてはならない事柄を考える必要が無い状態」と、漠然とした形で捉えていた。また、それが必ずしも問題と真剣に向き合って解決した結果ではなく、単なる「現実逃避」の状態である可能性もあると認識していることがわかる。

4. 1. 1 雇用をめぐる問題:先輩テキストを用いた「対話的問題提起学習」

雇用をめぐる問題を扱った第 2 回から第 5 回では、主に先輩テキストを用いた対話的問題提起学習を行った。対話的問題提起学習はパウロ・フレイレやウォーラーステインが識字教育に導入した問題提起学習に起源をもち、岡崎・西川により、明示的な対話性を加えられ改変したものである[13]。本稿では、岡崎[13]、野々口ほか[17]を参考にし、以下のステップを踏んで行った。

- 1) 先輩テキストを読む、先輩の話聞く。
- 2) 問いに対する答えを言語化する。
- 3) ペアになり、2) を共有しながら対話をする。

4) 対話の相手と自分の答えに見られる異同をできるだけ明確にし、そうした異同の背後にどのようなことが考えられるか、考察を深める。

ペアの相手と上記のステップを踏むことを通して、①自分の生き方の選択肢を広げるベースを作ること、②同一の状況の下で生きている自分や同世代の人たちというつながりを直感的に感じ取るもと[13]を作ることを目指した。先輩テキストとは、「学部生にとって少し自分の先を歩く先輩が、自分のキャリアを追求するにあたって、戸惑い、時には葛藤を抱えながら、自分とは何かを改めて問い、どう生きていったらよいか、自分なりの道を辿ったテキスト」[17]である。以上を踏まえ、本授業では、卒業を前にして進路の選択に悩んでいた加藤さん(仮名)のインタビュー[17]、某百貨店で総合職として働いていたが、過重労働による体調不良で退職を余儀なくされた経験を持つマリコさん(仮名)のスピーチと文字化資料を先輩テキストとして用いた。図 1 は授業で使用したスライドである。

前田 [18]は、「職業スキルの獲得」に重きを置いたキャリア教育の限界の一つとして、就職後に直面するかもしれない仕事上のリスク(例えば、過重労働)にどう対峙するか、実践的ワークからキャリア構築を学ぶ機会がほとんどないことを指摘している。マリコさんのテキストは学生が近い未来に経験する可能性がある社会の状況であり、この点で

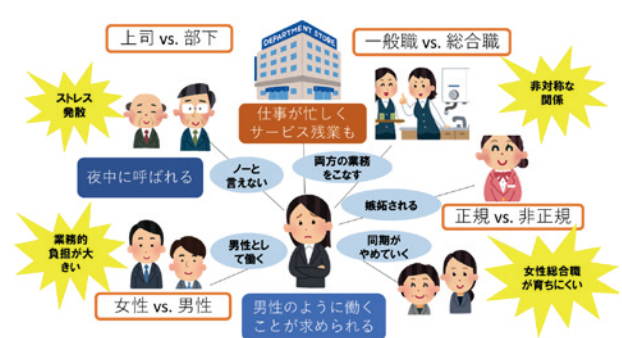


図1 第5回のスライド

就職という自分の起点と関連性が高い内容である。以下では、マリコさんの先輩テキストを扱った第 5 回の授業「グローバル時代に「働く」とは(3):先輩の事例から考える(20 代編)」を取り上げていく。まず、ステップ1(設問 1~3)では先輩テキストを読み、マリコさんになったつもりで考え、言語化した。以下では、A さんとペアの B さんのタスクシートに基づき、対話的問題提起学習の様子を記述していく。

1)私(マリコさん)がおかれている環境では一体どのようなことが起こっていると思いますか。

A さん	B さん
男としての仕事の役割、生活面での女としての役割の押し付け、人員減少によるしわ寄せ、中間管理職としての上からの圧力・下からの批判・過剰労働、同期の減少による偏見	・忙しい→総合職としての業務+休日出勤+人材不足+同僚の退社 ・一般職の嫉妬→給料の差 ・上司のセクハラ、パワハラ→基本男性優位的な風潮

A さんはマリコさんが置かれている環境を、男性と同じ働き方が求められつつ、女性としての役割も要求され、さらに人員減少によるしわ寄せが中間管理職に集中している過酷な環境として捉えていた。B さんも総合職としての業務や同僚の退社などによる人材不足で休日出勤が余儀なくされる多忙な環境、給料の差による人間関係の悪さ、男性優位的な風潮という、働きにくい環境でマリコさんが働いていると捉えている。

2)私(マリコさん)はどういう人間関係の中で生きていると思いますか。

A さん	B さん
上司から大量の仕事依頼	孤立気味で、気苦労が

頼、先輩の無茶ぶり、偏見を持った男性社員からの文句、待遇の格差による非正規・一般職からの敵意、思考放棄して頼ってくる後輩の中で生きている。 (図式化したものを筆者が言語化したもの)	多い関係であると思う。一般職の方からのやっかみ、上司・男性社員への対応、同じく忙しく疲労した同じ立場の女性同僚となると理解者も少なく、互いに助け合うにも限度があるとなると頼れる人の存在がいない。
---	---

Aさんは、1)で捉えているマリコさんが置かれている環境に基づき、想像力を働かせながらマリコさんが厳しい人間関係の中で生きていることを図式化していた。そのようなマリコさんの状況をBさんは、「孤立気味」「気苦労が多い関係」と表現しており、お互い助け合うにも限度があり、「頼れる人の存在がいない」と捉えている。

3)私(マリコさん)はここで何を感じていると思いますか。どういう問題(社会的・文化的・個人的背景に何がある)として捉えていますか。

Aさん	Bさん
社)人員育成面の問題のしわ寄せ(長時間のサビ残、休出) 文)女性への偏見、女性への役割要求、男性:軽視→ジェンダー 個)身体・精神疲弊・自由時間消滅・幸福度減少・継続不可能	男性に比べて女性が働くということでのハードル、障害のようなものが多いこと、そもそも働く中での悩みなどを聞いたり、助けてくれる存在がなく、孤立して苦難を乗り越えないといけないことから、やりがいでだけでは続けられない、息苦しさがある。

Aさんは、このような問題の背後には、人員育成面の問題のしわ寄せから来る長時間のサービス残業や休日出勤(社会的背景)、女性への偏見・役割要求(文化的背景)、身体・精神疲弊、自由時間の減少、助けてくれる存在や相談できる存在の不在から来る孤立感による幸福度の減少(個人的背景)があると分析している。一方、Bさんは男性に比べて女性が働きにくい環境になっていること、孤立した環境で助けが求められないことを問題としており、「やりがいでだけでは続けられない」と評価している。

次のステップ2(設問4～6)では、マリコさんと似

たような状況に置かれた場合を想像して考え、言語化した。AさんとペアのBさんのタスクシートに基づき、対話的問題提起学習の様子を記述していく。

4)マリコさんの選択についてどう思いますか。

Aさん	Bさん
英断。体の犠牲(命)、ブラック、自分、幸せ。	不安・恐怖から動けない、やめられないかもしれない。

仕事を辞める選択をしたマリコさんの選択について、Aさんは「ブラック」な仕事環境の中で、「体(命)」「自分」「幸せ」を犠牲にせず、仕事を辞めたマリコさんの選択を「英断」と評価している。一方、Bさんはもし自分のことだったら、不安と恐怖から退職に踏み切ることができないと考えていることがわかる。

5)マリコさんは、なぜ仕事を辞めることができたのでしょうか。働き続けるために、マリコさんにはどんなことができたのでしょうか。

Aさん	Bさん
・命の限界を知った。他の道を見つけた。ふんぎりがついた。優先したいものが見つかった。 ・〇休む、〇文句を言う、〇相談、〇訴える。 ×環境整備、×人員増員	体力の限界。(働き続けるために)会社には言うしかない。

マリコさんがなぜ仕事を辞めることができたかについては、AさんもBさんも「命の限界」「体力の限界」と捉えているが、Aさんはそれに加えて「他の道」「優先したいもの」が見つかったと想像した。一方、働き続けるためにできることとして、Aさんは環境整備や人員増員は難しいと考えているものの、「休む」「文句を言う」「相談」「訴える」などの具体的な選択肢を考慮しているのに対し、Bさんは「会社には言うしかない」という選択肢しか考えていない。

6)あなたがマリコさんだったらどうしますか。

Aさん	Bさん
-----	-----

辞めたい→会社を訴える	親友・家族と相談する。
-------------	-------------

設問1～5を踏まえて、自分がマリコさんだったらどのような選択をするかについて、Aさんは辞めて会社を訴えると述べていた。一方、Bさんは周りの親友や家族と相談するという選択をしている。

設問1～6の対話活動後に、「対話後の考察」を書く課題を行いながら、普段は気づかない自分のものの見方や考え方を省察していく。先輩(マリコさん)が置かれていた状況は、大学生であるAさんやBさんがこれから入っていく世界がどうなっているかをリアルに示していた。そこで、女性であるAさんがまず注目したのは、「女性に求められる役割への嫌悪感」だった。設問4～6の回答でもうかがえるように、Aさんは先輩と同じ状況に置かれた場合、「退職」という選択肢を選んでいて、しかし、Bさんとの対話を通して自分とは異なるBさんの考え方に触れ、少し考え方が変わったと述べている。具体的には、Bさんの「仕事にやりがいを感じていても、孤立しているならば幸せとは言えない。辛いなら、助けを求めたり、怒ったり行動に移さなくてはいけない」という考え方を知り、「自分から動かないと状況の打破は難しい」と思うようになったと述べている。

一方、Bさんは元々「自分で考え解決することも、誰かに助けを求めることも、どちらもバランスよく出来た方が良く考えていた」とこれまでの自分の考え方に気づいている。しかし、対話を通して「自分だけでの解決策を考えてしまっていて、誰かに相談してみようというアイデアを思いつくのに時間がかかった」ことに気づく。設問4～6の回答から見られるように、Bさんは、先輩のように意思決定を迫られた際に、不安や恐怖から「会社にとどまる」ことを選んでいて、対話を通してAさんの考え方に触れたBさんは、「自分の中での価値観や、物事の優先順位がはっきりしていて判断に迷うそぶりが無かった」と評価しており、「自分の中での価値観、物事の優先順位というべきものをよりはっきりさせるべきだと感じた」と述べている。BさんはAさんの持つ視座や価値観を自分のものとして取り込みつつ、「ただ、あくまで主観的なものなので、独善的なものになってしまうよう、その価値観は他者とのように違うのか、なぜ違うのかを冷静に考えて考え直していきたい」と自分の価値観とも対話しながら鍛えていきたいという意思を表明している。

以上、先輩テキストを用いて就職後に直面するかもしれない仕事上のリスク、選択に迫られる状況でどのように生きるかを考える対話的問題提起学習の様子を見てきた。AさんもBさんもこれまでの人生経験やものの見方、価値観、現時点での注目点などに基づき答えを出すため、答えは単一の価値に基づくものではなかった。AさんとBさんは「(健康的、失業による経済的)リスク」を回避するために「辞職」か「会社にとどまる」ことを選んでおり、対話をする前は「リスク」をどう回避するかという受身的な側面に焦点が当てられているように見える。しかし、対話をしながらお互いの価値観を取り込むことにより、「自分から動かないと状況の打破は難しい」

「ことや、自分の中での価値観、物事の優先順位というべきものをよりはっきりさせる」といった新たな選択肢を獲得していることがうかがえる。このように、マリコさんが置かれている状況や意思決定を自己を起点に追体験し、対話をすることで、お互いの生き方に対する考え方やモノの見方に気づき、比較することができた。この過程で、お互いの生き方の選択肢を広げるベース[13]とすることができると思われる。

以上マリコさんの事例から「若者の雇用に何が起きているか」について見てきたが、第5回の授業後に文献(『若者と労働』第6章)を読む課題と「4つの問い」を考えて言語化する課題を出した。以下はAさんの4つの問いの記述である。

【第5回のあとの4つの問い】

① 世界はどうなっているか

成果主義の導入により、基準が不明瞭になった。そのため、上層部は足切りしやすくなったことで人員が減り、そのしわ寄せで、経験のない大学生に即戦力を求めるようなブラックがはびこる世界。人を使い捨てる会社がのさばる世界。

② その中でどちらに向かって歩んでいくか

利用される側から、せめて利用されない側へ。ブラックの正社員ではなく、零細企業の社員へあるいは、超えた側へ(公務員)

③ 他の人とどんな関係を作っていくか

先輩や、後輩とうまくいかなくても、最低でも同期と長期的に切磋琢磨したり、協力しあったり、相談しあえる関係を作っていきたい。

④ 自分とは何か

ブラックに入らない、入ったとしても洗脳を解いて抜け出していける自分。やりがい搾取されない、きちんと人として扱われる正社員として生きていこうと思って

いる自分。

Aさんは、これまでの経験や授業で得た情報、マリコさんの事例をめぐる仲間との対話などに基づき、考えていることが「4つの問い」への答えからうかがえる。Aさんは、今若者が働いている世界を「成果主義」「足切り」「人員が減り」「即戦力」「使い捨て」「ブラック」のようなキーワードで表している。このような世界認識の下で、「やりがい搾取されない」「利用されない」ために「ブラックの正社員」ではなく、「零細企業の社員」または「公務員」を目指したいとしており、そこで協力し合い、相談し合える人間関係を作りたいと述べている。Aさんがあえて零細企業の社員を選んだ理由は、④「自分とは何か」に対する答えからうかがえる。大手百貨店の総合職として働いていたマリコさんの事例から正社員でも様々なリスクに直面していることを目の当たりにし、「きちんと人として扱われる正社員」として働くために、より競争の少ない環境で協力し合えるのが「零細企業の正社員か公務員だ」と仮説を立てて選んだ結果である。

Aさんが考えた4つの問いへの答えは、「仮決定」[13]のものであり、上記の考え方も仮説に過ぎない。何故なら、零細企業や公務員であっても、日本社会ひいてはグローバル社会という同じシステムの中に位置するからである。従って、「成果主義」「足切り」「人員が減り」「即戦力」「使い捨て」「ブラック」はどの職種においても多かれ少なかれみられるものである。

Aさんにとっては、4つの問いへの現段階の答えを出発点として、零細企業や公務員の世界では何が起きているか、どのようなリスクがあるのか、などの「自発する問い」に対して情報を更新しながら、答えていくことで単一要因に依存した決定によるリスクが避けられる。

この段階の「4つの問い」への答えは、「雇用」に焦点が当てられており、なぜこのような事態が起きているかに関わる世界認識は見られない。Aさんの「4つの問い」の記述からわかるように、①世界認識、②行動基準、③人間関係、④アイデンティティーはお互いにつながっており、さらなる追求が続かなければ、現段階の「雇用」にフォーカスされた狭い世界認識は、狭い行動基準や狭い人間関係、狭いアイデンティティーを形成する可能性がある。言い換えると、狭いアイデンティティーで世界を認識することで、認識できる世界、選択できる行動基

準、つながりを持つ人間関係までもが狭くなることを意味する[13]。しかし、生態学的主体性の形成を目指すとするなら、結論を急がず、この現実は何故そうなのか、と問い続けることが必要である。問い続けることで、新たな言葉を獲得し認識が広がる。その過程で「狭い私」は確実に拡張していく。例えば、雇用を起点にし、グローバル化と雇用とのつながりを辿ることで「狭い私」を広げることができる。

続く第6回以降では、雇用とその背後にあるグローバル化と経済変動について取り上げた。具体的には、1980年代終盤～1990年代初期の「バブル経済期」、1993年～2005年の「経済低迷期」、2005年からの「格差拡大期」に雇用の軸がどのように揺れ動いたかをデータを用いて確認した。その後、これらを知識にとどめず自分の生と関連づけて考えるために、2009年に放送されたNHKスペシャル『“35歳”を救え あすの日本。未来からの提言』を見て、対話活動を行った。このドキュメンタリーでは、当時の35歳に行ったアンケート調査をもとに20年後の日本をシミュレーションし、中間層の崩壊が急速に進むことが予測されており、12年後を生きる受講生がその当時と今を比較しながら「世界はどうなっているか」を考えることができた。グローバル化と新自由主義の下で雇用の流動化により不安定な状況の中で生活している4名の35歳を取り上げている。その群像を通して、貿易・金融・資本の自由化や規制緩和による経営破綻、給与カット、リストラ、賃金抑制策、可処分所得の減少、転職による年収の減少、産業の空洞化による地方の疲弊など、グローバル化によって雇用軸がどのように揺れ、その揺れが人々のライフコースにどのような影響を与え、そして、12年後の今、自分の目の前の現実として現れているか、考えることができた。

4. 1. 2 食糧をめぐる問題:対話的問題提起学習

第7回～13回では、雇用や経済に続いて「食糧」を軸に、それと関連する環境、エネルギー、貧困、格差問題を取り上げた。第7回では私たちの食に何が起きているか自己を起点に考えるために、まずは自分自身の食生活を振り返ってもらった。学生は外食が多く、外食であるほど食材の産地や製造、流通のルートが分かりにくくなるため、自分ではコントロールできないリスクを多く抱えることになる。そこで、まず食品を選ぶ時に何を重視して選

ぶか、どのような問題を感じているか、自分が食べている食品がどのように生産されているかを想像してもらった。その後、大量生産・低コストの裏側にあるリスクを伝えるドキュメンタリー映画を視聴し、対話的問題提起学習を行った。以下の図 2 は授業で使ったスライドである。

【視聴前】タスク①食生活をふり返る

- ・ 食品を選ぶとき、何を重視しますか。それはなぜですか。値段、産地、味…
- ・ 自分の食生活に問題を感じますか。問題を感じるとしたら、それはどのような問題ですか。
- ・ 自分が食べているものは、どのような過程(生産者、加工業者)を経て食卓に上っているのでしょうか。

【視聴後】タスク②文章化

1. ここではどんなことが起こっていると思いますか。
 - 鶏肉は、どのような仕組みで生産されているか。
 - 鶏肉の生産に関わっている人や組織はどのようにつながっているか。
 - それぞれどのような問題やリスクを抱えているか。
2. キャロルはここで一体何を感じていると思いますか。また、どういう問題として捉えていると思いますか。
 - インタビューに答えているとき
 - 歩けなくなって死んだ鶏を処理しているとき
 - 鶏がいなくなった鶏舎を歩いているとき
 - 新しい設備の設置を拒否したとき
3. もしこれが自分のことだったら、あなたはどう感じ、どう行動するでしょうか

図 2 第 7 回のスライド

以下では、A さんの第 7 回の授業の振り返りを引用しながら、A の世界認識を見ていく。

【A さんの第 7 回の振り返り(前半)】※下線は筆者によるもの

また、ドキュメンタリー「フードインク」を視聴した際、自覚しているつもりだったがやはり、食に関して(失礼だが)悲惨な現場を見ることになり、いささかショックを受けた。

少ない企業が食肉市場を寡占している事実を知り、食糧危機の危険性や雇用の不安定、健康面での危うさを感じた。なぜなら、たった四つの企業に食料を 80%を占められていることは、我々の食事は彼らに握られていることを意味しているからだ。そして、握られているために消費者のニーズは彼らにとって決して尽きない利益となる。だから、企業が雇用に関する横行(例えば、非正規雇用や、理不尽なリストラ、外国に工場を作成することでの経済力の低下やモノカルチャー化の促進)をしても正当化されてしまう。ニーズがある限り彼らは消えないため、安定しており余裕がある。さらに、企業は利益確保が目的だから、効率化のために命の尊厳も清潔感も企業は引き換えにしてしまう。暗く狭い場所に大勢の生き物を閉じ込める。それに飽き足らず、遺伝子や薬品を投与して異常な小物(原文のまま、生き物)さえも作り出して

しまう。尊厳の感じない場所で育てられた不潔で生き物として異常なものを我々は、ブランドを信じて口にしている。ノロウイルスや薬品、遺伝子組み換えによる被害を避けることは困難だ。

A さんはドキュメンタリーからの情報に基づき、食糧危機の危険性や雇用の不安定、健康面でのリスクが一握りの企業による食肉市場の寡占に起因していると認識している。具体的には、企業が利益確保のために生産過程を効率化していく中で、生き物や従業員、消費者に対する尊厳が守られていないが、消費者はその裏側のことを知らないということである。

振り返りの記述から、この活動を通して現実社会がどうなっているかを A さんが能動的に認識しはじめていることが見て取れる。A さんは、「自覚しているつもりだったがやはり、食に関して(失礼だが)悲惨な現場を見ることになり、いささかショックを受けた」と述べており、知識レベルで自覚していたことが、キャロルというリアリティーを持っている人間が置かれている状況に感情移入し「ショック」を受けるといふ、感情レベルへのシフトからもうかがえる。しかし、ここまで読むと、A さんが見ている世界を形作っている存在の一部としての A さんの姿は見えず、単に企業の問題として捉えているように見える。

しかし、後半の振り返りでは自分を消費者として位置づけ、つながりを形作っている存在として認識しはじめていることが読み取れる。

【A さんの第 7 回の振り返り(後半)】※下線は筆者によるもの

しかし、自分を正当化して企業ばかりを責めることは出来なかった。企業による恩恵を受けて無責任な要求をしているのが自分であったということに気づいたからだ。「安く、多く、おいしく、常に手の届くもの」。そんな両立が困難なものを提供する側の苦労も知りも考えもしないで好き勝手言っていた。当たり前のことだが、企業は求められたものに応えないと立ち行かない。企業の維持にはそれを強烈に感じた。また、企業が個人の仕事を淘汰していき、その範囲を拡大していくのを容認していたのは紛れもなく自分であった。自分さえよければ他人の生活には無知、無関心、無頓着。それが企業を肥大化させた原因で、結果として自分にとって大切なものを簡単に明け渡していたということに気づき、罪悪感と羞恥心にかまれた。今から、企業や社会の現状を変えていくことは難しい。なぜなら根幹を握られてしまっているから。しかし、同時に変える手段があるならそれは無知、無関心でないこと。つまり、当事者意識で知ろうとして、

覚えておき、必要な時に情報を提供、考えを主張していくことだと羞恥心に駆られながらも感じた。社会の深刻化や企業の横行が正当化されたのは「悪い企業の経営者」のみではなく「企業の奴隷」と「無知、無関心な消費者」があふれているからだと考える。ゆえにここまで事態が深刻になった。個人の努力で不可能になったなら、大衆の啓蒙を進めることが必要になるはずだ。そのため、私はこの授業で知った、考えたことを忘れずに必要な時に伝えていこうと思う。

消費者としての自分が、両立の困難なもの(安く、多く、おいしく、常に手の届くもの)を無責任に求めることで生産者を苦しめていることに気づき、「それを容認していたのは紛れもなく自分であった」と認めている。それゆえ「自分を正当化して企業ばかりを責めることはできない」と述べており、自分がそのつながりを作った一員であることを認識している。

また、「他人の生活には無知、無関心、無頓着」な自分の態度が企業を肥大化させ、その結果として「自分にとって大切なものを簡単に明け渡していたということに気づき、罪悪感と羞恥心にかまれた」と述べていることから、Aさんがはじめて生態学的な人間関係を認識するようになったことがわかる。Aさんは自己を起点にし、両立できない要求→企業の対応→食糧危機や雇用の不安定→健康面でのリスクという、世界と自己の間にあるつながりをたどって自分との関係を認識(生態学的世界認識: [13]している。そして、自分自身の生が自分には見えていない世界の中にいる他者(生産者としてのキャロルやキャロルを取り巻く人、モノ、コト)と結びついており、互いが抱えているリスクも共有しているという認識にたどり着く。

さらに、企業や社会の現状を変えていくことは難しいと言いながらも、「当事者意識で知ろうとして、覚えておき、必要な時に情報を提供、考えを主張していく」と述べ、現実を変えることに向けての意志を示している。このように生態学的世界認識をすることではじめて「自分の選択が他者の人生や生活に与える影響を考慮に入れる」[15、19]ことができ、そうした生態学的人間関係を意識することで社会を変革するための意志も芽生えと考えられる。

このことは、「職業スキルの獲得」に重きを置いたキャリア教育の限界として指摘されてきた、「企業組織の営利活動が公共的倫理に反した場合、その矛盾についてどのように考え、行動すべきかを考える機会がない」という問題 [18]に対する一つの解決策になるのではないだろうか。雇用や食

糧、環境破壊などは、どれも人類が直面する切実な問題であり、相互に繋がっているが、それらのつながりを意識して考える機会はあまりなく、自分のキャリアと関連付けて考える機会はさらに少ない。しかし、これまでの授業で取り上げてきた群像(マリコさん、キャロルなど)を自分と関連づけてとらえていくことで、自分と那些人たちの間に相互依存的な関係があることやリスクを共有している関係であることに気づき、どう行動すべきかについて考えるようになったのではないか。

その様子が他の学習者Cの振り返りからも見られ、授業中に共有した。Cの振り返りを以下に示す。

【学習者Cの第7回の振り返り】※下線は筆者によるもの

今回の授業を受講して、大企業じゃなくて中小企業でもどのようにして働くか工夫したら、社会にとっても良いサービスを提供でき、自分にとってもやりがいがあるような仕事をおこなっていくことができる、という自分の今までの考えは甘かったのだと考えた。今日見たビデオでは大手の取引先の言いなりになる中小企業、という構図を見た。中小企業側には何をする権利もなく、ただ指示通り業務をこなしていた。鶏を拾っているシーンは特に心苦しく、そのような辛いところも中小企業が行う業務だった。そのような現状を見てると、仕事に対する活力は出ず、創意工夫が生まれるような仕事なんてできないと思った。将来就職したとしてもそのような業務をやる、または大企業側でやらせる可能性があると考えたら、このシステムは変えていくべきだと感じた。

Cさんはキャロルさんの事例から、中小企業側の創意工夫だけではどうにもならない現状を認識し、将来の自分とつなげて考えていた。中小企業で働けば、キャロルのようなリスクに直面する可能性があり、大企業で働けばそのような業務をやらせる側になるリスクがあることに気づき、「このシステムを変えていくべき」と述べている。

Aさんは授業で紹介されたCさんの第7回目の授業の振り返りを読み、第8回目の授業の振り返りで次のように述べている。

【学習者Aの第8回の振り返り】※下線は筆者によるもの

前回書いたときは、食糧問題について悲観的な意見や自罰的な意見しか書いていなかったが今回、他の人たちの振り返りで、自分が変えていくという意思表示を出したり、改善策を提案したりしているのを見て、悲観的に、自己無力感を勝手に感じていたと気付いた。また、グループワークで、つながりを見ているうち

に意外なつながりや影響があることに気づいた。(例えば、不法就労者と、消費者との関係など)。次回の発表のために、見えた繋がりから、改善策や原因を突き止めていきたい。

AさんとCさんが認識している世界は重なる部分もあるが、それぞれ異なる部分もある。現状から見えてくる不全の姿やその不全に働きかける行動基準も異なる。Aさんは「悲観的に、自己無力感を感じていた」自己をCさんの振り返りを通して認識できた。さらに、自己の行動基準を見直すきっかけを得ている。

4. 1. 3 世界のつながりをとらえる:「キーワードプロジェクト」と「つながりの図作成」

第7回で取り上げた大量生産・低コストの裏側で様々なリスクに直面しているキャロルさんの例は、キャロルさんを取り巻く大企業、ひよこの孵化工場、解体工場、不法移民の労働者などが中心で主にミクロな部分に焦点を当てていた。しかし、なぜキャロルが今の状況に置かれているか、なぜこのように事態が動くのかを想像力を持って考えるためには、よりマクロな視点でとらえる必要がある。そこで、第8回ではグループでつながりの図 [13] を作成した。自分なりのキーワードを図示してつないで、なぜキャロルが今の状況に置かれているか、キャロルと学生それぞれはどのようにつながり、どのようなリスクを共有しているかを視覚的にもわかりやすく捉えるために、グループで議論する活動である。この段階では、学生たちはグローバル化をたどるための言葉を持ち合わせておらず、キャロルを中心とするミクロな世界のつながりにとどまっていた。

そこで、第9回の課題として「世界はどうなっているか」という問いのもとにテキスト[20]を読んだ。その際に「読んで理解した」にとどめず、読みながら自分なりに重要と感じられるキーワード(出来事、事柄など)を思いつくままリストアップする。次に、そのキーワードと自分自身、マリコさん、キャロル、などがどのようにつながっているか考えてつないでみる。最後にそれらをつなげて、文章化した。このキーワードプロジェクト[13]は、単に与えられたテキストを受身的に読むのではなく、自分の生き方を考えるための手立てを考えるために、「自分仕立ての世界認識の枠組み」を育成することを目的とする。

以下ではAさんのキーワードプロジェクトの様子を紹介する。Aさんが重要だと考えて選んだキーワードは以下の通りである。

【キーワードプロジェクト:キーワードの選定】

儲け、必要十分、豊か、カネ、幸福、資本主義、コモング、モノカルチャー、自然破壊、分業、新自由主義、インターネットの発達、非正規雇用、小さな社会、循環、マネーの流入、平等な配分

Aさんは、これらのキーワードと自分自身、マリコさん、キャロルさんなどがどのようにつながっているかを次のように述べている。

【キーワードプロジェクト:自分との関連づけ】

私の幸せな生き方に直接的ではないものの関連している。そして、食に関して言えばかなり直接的に関係している。まりこさんやキャロルなどの人々とは互いに存在が見えない関係であるが、彼女らの不幸や冷遇は自分が大企業のもを購入することで間接的に関わる。その一方、彼女らの境遇がそのまま、自分のキャリアや職業に関連するなど、一心同体の関係性にある。つまり、彼女らの厚遇も共通するので福祉的で、私の幸せな人生において資源の配分を公平にやる社会が、今の資本主義社会よりも必要になってくる。

Aさんは、マリコさんやキャロルさんとはお互い存在が見えない関係であるが、自分自身の幸せな生き方に直接・間接的につながっていると述べている。まず、消費者側としては大企業の商品を購入することで間接的につながり、働く側としては彼女らに自分の姿を重ね、自分のキャリアや職業に直接的に関連すると捉えている。これを踏まえて、自分が幸せな人生を送るためには、今の資本主義社会より「資源の配分を公平にやる社会」が必要であると、自分とのつながりの中で考えていることがうかがえる。

これらをつなげて最後に文章化してもらったのが以下の文章である。波線の部分はAさんがあげたキーワードである。

【キーワードプロジェクト:文章化】

企業により、儲けが代替的に取得することが認められ、我々の経済は豊かさを求めて成長が続いている。しかし、カネのために非正規用(原文ママ)の増加や足切りが増えたとし、GDP 等で曖昧な幸福度は儲けの量に関連するといった誤解も流布されるようになった。その GDP 増加、儲けの増加のためにモノカルチャー化を推し進め、必要十分以上の量を作り出し、自然を破壊してきた。新自由主義による分業化でマネーの流入が増加したが、インターネットの普及で

さらに加速していった。そのことは、南の国における、経済困窮の悪循環を生み出し、経済格差を作り出してきた。なぜなら、調子のいい時にお金を入れて、利益を搾取する一方、経済が不安定になると一斉にお金を引き上げるために経済力の大幅な減少を引き起こしてくるためである。それで何度も経済不安定を経験することになるからである。

このことは私にとって対岸の火事ではない。資本主義が我々の経済を不安定にしたために、大企業は利益確保のため、非正規を用いて従業員を切り捨てたり、冷遇が起こりうる。また、分業化によるモノカルチャー化は、自給率を下げ、企業の独占率と依存度を跳ね上げてしまう。それは大企業の支配や横行の過激化を示している。それはまりこさんの被害者の存在が語っている。

このことの原因は、前述した新資本主義などが挙げられるが、何よりも配分の偏りこそが原因であると考えられる。政府によるバランス調整や管理を今一度ゆだねる必要がある。そのためには私は企業の横行に抗議したり、自分の幸せとは何か自己理解していくことが必要になる。

Aさんは、キーワードプロジェクトを通してマリコさんとキャロルさんの体験を世界の中に位置づけ、

雇用の背後にある経済状況とのつながりを見ている。儲けや豊かさ、成長を重視する新自由主義の経済においては利潤追求のために、例えば、鶏を自然な方法で飼育するのではなく、工場型・分業型にし、ブロイラーという特定の品種に限ることでモノカルチャー化が進むこと、鶏を必要十分以上に大量生産し、それが自然破壊につながっていること、大企業が市場を独占しているがゆえに依存度があがる一方で自給率を下げてしまい、さらに依存度をあげる循環を生み出しており、利益確保のための非正規雇用や従業員の切り捨てという雇用面のリスクへとつながるとしている。また、視点を世界(北と南の国)の文脈に広げ、金融の自由化によるマネーの流入と引き上げにより南の国における経済困窮の悪循環を生み出し、経済を不安定にしていること、それが企業の構造改革・雇用の流動化など雇用面に大きな影響を与え、マリコさんやキャロルなどの被害者を生み出しているとしたうえで、配分の不平等にも言及しながら、新自由主義的な資本主義の構造的問題について指摘している。

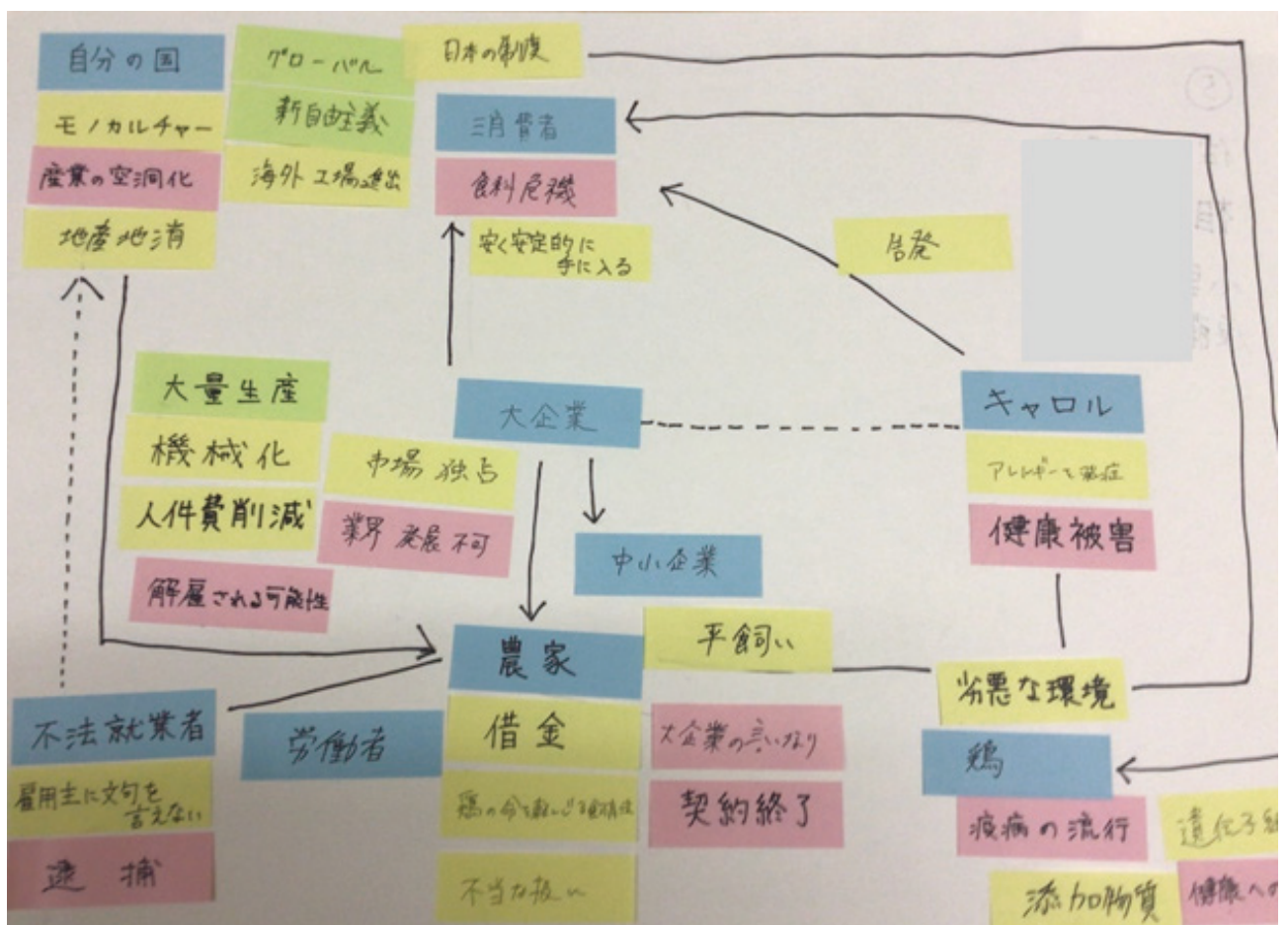


図3 つながりの図

マリコさんやキャロルさんに将来の自分の姿を重ねていた A さんは、「このことは私にとって対岸の火事ではない」とした上で、「私は企業の横行に抗議したり、自分の幸せとは何か自己理解していくことが必要になる」と述べている。A さんは、自分の生き方とグローバル化や新自由主義経済の概念をつなげた形で捉えており、生き方の選択(企業の横行に抗議)や判断(自分の幸せとは何か自己理解していく)に参照することができると考えられる。しかしこの時点では、「配分の偏り」が原因であると考へながらも、それについてどう働きかけるかについては「企業の横行に抗議」といったやや消極的な態度を示していた。また、「政府によるバランス調整や管理に委ねる」にみられるように、資本主義社会における政府と経済の関係には目が向いていないことが注目される。

以上、キーワードプロジェクトにおいてAさんが与えられたテキストを自分なりの文章にする作業を通して「自分仕立てによる世界のつながりの記述」(岡崎 2009)をしている様子を見てきた。これらは、A さんのこれからの人生の中で、生き方を選択したり判断する際に、考えるための根拠として機能すると考えられる。

以上を踏まえ、キーワードプロジェクトでリストアップしたものや自分なりのキーワードを追加し、グループでつながりの図 [13]の修正・精緻化を行った。A さんのグループで作成した「つながりの図」を図 3(前頁)で示す。

第 10 回の授業では工場型養鶏場と同じような状況がバナナプランテーションでも見られることを取り上げた。種のないバナナを生産するために株を分けて育てるため、病気になりやすく、病気を防ぐために大量の農薬が使われ、プランテーションで働く人々の健康が侵されている。農薬や化学肥料代が多くかかり、農場を続けるためには借金をするしかなく、借金を返済するために悪循環から抜け出すことが難しい状況になっている。

以下の図 4 に授業で使用したスライドを示す。

その他にもスウェットショップ(搾取工場)とファッショ、コーヒー農場、原発などにも似たような状況があることを確認し、自然や労働者の搾取から利潤を得る資本主義の構造的問題について考えた。

第 11 回の授業では、アグリビジネスにおける地下水の過剰使用問題を主に取り上げた。理解を深めるために、インターネット記事「アボカドは「悪

大量生産・大量消費・大量廃棄の社会経済システム



図 4 第 10 回のスライド

魔の果実」か?—ブームがもたらす環境破壊と難民危機」[21]を、自己を起点にして読み、つながりの図を作成する事前課題を行った。授業ではつながりの図をいくつか紹介しながら、自分とアボカドの生産者や地元住民たちの生活、自然環境にどのようなリスクがあるかをつながりの中で考えた。グローバル化のつながり全体の広がり自分に位置づけてみることによって、自分の生きることと関連づけて考えることができる。

以下の図 5 は授業で紹介した、受講生の「つながりの図」の一例である。



図 5 受講生のつながりの図

第 12 回の授業では、コモンとしての地球について考えた。具体的には、アグリビジネス、種の資本

化、水道民営化などの問題を取り上げた。アグリビジネスのような資本は、地球を搾取する対象として扱っており、大量生産するための工業化した農業は人間と自然の関係を希薄化させていることを再度確認した。

第12回の授業後に、再び4つの問いに答える課題をもらった。以下はAさんの4つの問いの記述である。

【第12回のあとのAさんの「4つの問い」】

① 世界はどうなっているか

新自由主義の下、加速した資本主義のサイクルが、グローバリズムで拡大していき、その影響が世界規模になっている。それにより、深刻な自然災害や食糧危機、水不足、エネルギー問題などが起こる、持続不可能な社会になっている。また、新自由主義での、資本の自由化などで非正規雇用やリストラ、過重労働といった問題が蔓延り、企業の富の独占と値上げという横行も横行する、生活困難な、維持不可能な世界へと進行している。富、コモンの所有権を持つ個人による世界の専制政治がなされる世界ともいえる。

② その中でどちらに向かって歩んでいくか

個人による独占で多数の支配が起こりうる資本主義の方向ではなく、他者と共同し共有する持続可能な社会、地球社会へと歩んで生きたい。

③ 他の人とどんな関係を作っていくか

搾取する側(利用する側)搾取される側(利用され、押し付けられる)という被害関係ではなく、ルールを作って、平等や公平性を保たれた裏切りの無い対等な、コモンを共有する、人種、文化を超えた運命共同体のような関係性を他者と作っていききたい。

④ 自分とは何か

資本主義社会では、需要を生み出し、その需要から生まれたものを買うことで、企業の影響力を強め、間接的に、環境破壊や、労働環境悪化など世界や人々に被害を与える加害者であり、その被害を最終的に受ける被害者でもある。自分には関係ないと高を括る、当事者意識のない、無自覚、無責任、無関心な大衆の一人でもある。今では、多少の知識と、ほんの少しの当事者意識を持つ世界との関係者である。また、対策を考えようとするが、思いつかない世界の構成員でもある。

Aさんが認識している世界は、端的にいうと「持続不可能な社会」「維持不可能な世界」であった。それは、「新自由主義」「グローバリズム」の下で「資本主義のサイクル」が拡大し、環境面と雇用面に負の側面が見られることから導かれた認識であり、

富やコモンを独占する一握りの個人によってなされる「世界の専制政治」によるものでもあった。これらを踏まえて、Aさんは自分のことを加害者兼被害者であると位置づけている。具体的には、「間接的に、環境破壊や、労働環境悪化など世界や人々に被害を与える加害者」であるが、その被害を最終的に受ける被害者でもあるという。これは、鶏肉やバナナ、アボカド、ファストファッションなどの事例から、Aさんが消費者として需要を生み出し、その需要から生まれたものを買うことで、環境破壊や、労働環境悪化に加担しているという認識から生まれたと考えられる。そして、つながりの図作成や仲間との対話を通して、労働環境の悪化や環境破壊のリスクからAさん自身も自由になれないことを認識できたと考えられる。これらの認識の下で、Aさんは現在の世界とは正反対の方向へ歩みたいと述べている。それは「他者と共同し共有する持続可能な社会」であり、そこでの人間関係は搾取する側／搾取される側という構図の「利害関係」ではなく「運命共同体のような関係」である。

第5回後の「4つの問い」への答えは「雇用」のみに焦点が当てられており、世界認識や行動基準、人間関係、アイデンティティーも「雇用」に限られていた。第12回の4つの問いへの答えにおいては、なぜ自分たちの「雇用」がそのような状況になっているかを、単一要因に還元せず、雇用から先に広がる経済面でのグローバル化とのつながり、雇用や経済を超えた環境面とのつながり、世界の人々とのつながりにまで認識が広がっていることがわかる。人間関係も第5回では、将来の職場内の先輩や後輩、同期という狭い人間関係になっていたが、第12回では「運命共同体」というより広い人間関係を想定していることが見て取れる。そこで得られたアイデンティティーも第5回ではブラック企業から身を守る「きちんと人として扱われる正社員」だったが、第12回では、被害者兼加害者として持続不可能な社会を形作っている「世界の構成員」に変化している。そのようなアイデンティティーの下で、第5回では「ブラックの正社員ではなく、零細企業の社員か公務員」となるという行動基準をもっていた。一方、第12回では「ほんの少しの当事者意識を持つ世界との関係者」とであると認識しつつも、「対策を考えようとするが、思いつかない」と述べている。つまり、現状を不全と捉え、行動基準としてはその不全をただす方向に生きていきたいと考えている。しかし、そうはいつでも、具体的な対策を打

ち出すことはできないということであろう。おそらく、A さんは何かを解決するための対策を考える際に、「単一原因の除去の形」[13]をこれまでとってきた可能性が高い。例えば、「ブラック企業の正社員はやりがい搾取される」という仮説に基づき、その問題を解決する対策として、原因となるブラック企業の正社員を除去し、「零細企業の社員か公務員」という対策を考えるという思考法である。問題はつながりの形をしており、解決の仕方もつながりの形で考える(=つながり方を変える)といった思考法は一足飛びには獲得できない。A さんは、つながり方を変えていきたいという意志とこれまで慣れ親しんできた「単一原因の除去の形」による問題解決を求める思考の間で苦闘していると考えられる。

第 14 回～第 15 回の授業では、つながりの中で持続可能な生き方を考える授業を行った。

4. 1. 3 持続可能な生き方を考える: ロールレタリング

持続可能な生き方を考える方法として、岡崎敏雄はロールレタリング(Role Lettering)を提案している[13]。ロールレタリングとは、「自分自らが、自己と他者という両者の視点に立ち、役割交換を重ねながら、双方から交互に相手に手紙で伝える。この往復書簡を重ねることによって、相手の気持ちや立場を思いやるという形で、自らの内心に抱えている矛盾やジレンマに気づかせ、自己の問題解決を促進する方法」[22]である。

元々ロールレタリングは、春口により矯正教育の現場で発展した技法であるが、近年、大学生のキャリア教育の方法としても注目されている[23、24]。これまでの研究では、「将来の自分」[23、24、25]または、「重要な他者」[24、26、27]を相手にロールレタリングを行っており、主な内容は進路相談や悩み相談である。ここでいう「重要な他者」とは、家族や友人、先生など「今までの人生でやさしく理解し温かく支えてくれた人」[24]が多いが、日常生活への関わりのほとんどない内在化された他者まで広く含む概念でもある[28]。

本研究では、第7回目で取り上げたドキュメンタリーの登場人物「キャロル」を「重要な他者」として位置づけ、第 13 回目の課題としてロールレタリングを行った。キャロルと受講生は、お互い直接的影響を受けているわけではないが、相互依存的な関係であり、リスクを共有している関係でもあるからである。手紙の内容は、キャロルの生き方の選択や

判断に関するものにし、岡崎敏雄[13]と野々口ほか[11]を参考に、以下の手順で行った。

1) 私→キャロル(往)

第 7 回目の授業を思い出しながら、キャロルに紙を書くように指示した。内容は、キャロルへの共感や自分なりに感ずること、自分だったらどんなことを思い、どんなことで迷ったか、何を基準に決断したか、どう行動したか。「～～することは考えなかったのか」「なぜ」(例:なぜ抗生物質をひよこに打つのか)、その後どんな生活をしているかなど、キャロルに訪ねたいこと。

2) キャロル→私(復)

キャロルになったつもりで、キャロルだったらその手紙を読んでどう考えるか、質問にはどう答えるか、どんな返事を書くか考えながら返信を書く。

以下は A さんの「私→キャロル(往)」のロールレタリングの記述内容である。まず、A は自分の生活がどうなるかわからない不安な状況で告発する勇気が持てず「ずっと耐えて自分の身をすり減らす方を選んでいたと思う」と自分の率直な感情について述べている。その後、自分とは異なる選択をしたキャロルに対する A さんの質問が続く。今後の生活が厳しくなるかもしれない状況で、告発に至った経緯や実行方法、告発した後の生活などについて次から次へと自発する問いを問うていることがわかる。

【ロールレタリング:A→キャロル】

久しぶり、最近の調子はどう？アレルギーは治った？聞いたよ。会社との契約打ち切ったんだって？しかも、告発までしたんでしょ？大変だったよね。お疲れ。多分私だったら、できなかったよ。自分の今後の生活がどうなるか分からなかったし、やっていけるか不安だったから、勇気も持てなかった。ずっと耐えて自分の身をすり減らす方を選んでいたと思う。そう考えるとすごいよね。①どうしてそんなに頑張ろうと思ったの？②ほかの人たちに任せようと思わなかったの？③どうやって告発できたの？やっぱり、④ニワトリの姿を見ていやになった？足が折れて死んだニワトリやひよこの選別はどう思った？いろいろと聞き過ぎちゃったね。答えるの、大変かもしれない。でも、最後に一つ答えてほしい質問がある。⑤自分が殺されたり、不名誉なレッテルをはられる可能性を顧みずに告発できたのはなぜ？ぶしつけな質問ばかりかもしれないけど答えてくれたらうれしい。読んでくれてありがとう。後で実家から送られてきた果物をお礼に送る

から待ってね。そういえば、⑥告発した後の生活はどう？家と関わった。変わってたら、住所変えないといけないから教えて。仕事は変わった？気に障らない限りで教えてね。今回はありがとう。頑張ってるね、応援している。お元気で

次は A さんの「キャロル→私(復)」のロールレタリングの記述内容である。A さんは「私→キャロル(往)」の質問に対して、キャロルになったつもりで一つ一つ丁寧に答えている。

【ロールレタリング:キャロル→A さん】

久しぶり、手紙をありがとう。心配させていたみたいね。一応、契約を切って、告発した後、農業にかかわらなくなったからアレルギーの症状は少し落ち着いてきた。さて、質問のことだけど、たくさんあるから答えるのが大変だった。初めに、①頑張ってるのは自分が正しいことをしていると信じられたからだと思う。あんな育て方が許されるとは思わなかったし、あんな扱いを受けなくてはならない正当な理由もあるはずがないと思ったの。②次にほかの人たちに任せることをしなかったのは、他の人たちにそんなことをする体力も、気力もないし、保身のために動けないと思ったから、つまり頼りにはならないと思ったからね。③告発は、ネットで調べたり、新聞記者の人と話したりして実行したわ。告発した理由の一因としては、ニワトリは関わってはいらぬ。④農家だから、生き物の死にいちいち過剰に反応はしないわ。だけど、葉で足が折れて死んだニワトリの死体を捨てるのは疲れたわ。あと、ひよこに関しては機械に押し付けられているのを見ることが好きになれなかった。最後の質問は、もちろん、私もそのリスクは考えないことはなかったわ。でも、⑤自分が動かないと状況が変わらない中で、自分のためだけではなく、他の人のためにも、動かなくてはならないと思ったのよ。私は、命令とはいえ、あの鶏を育て出荷した人間で、知っている人間よ。責任が無いとは言えない。関係者として、あの企業の強行は止めなくてはならないと思った。要するに使命感と義務感に駆られた。責任の前に使命もリスクも関係なかった。だから私は全てを投げうって告発できた。これで以上ね。どう？満足した？ところで、家の住所のことだけど、私の家は変わってはいないし、仕事も特に変わってはいないわ。借金が多いから、引っ越しも転職もできる余裕はないの。それに、⑥少しでも安全な、健やかなニワトリを育てて生きたいと思った。企業に縛られない自然な育て方で。これからはあの企業と関わらないわ。仕事の従事者としても消費者としても。それがあの企業にできる抵抗だと思う。それはとにかく果物ありがとう。楽しみに待っているわ。お返しに何か送るわね。また今度会いましょう。また逢う

日まで

キャロルが生命・身体にかかわる危険の可能性も顧みずに告発できたのは、キャロル自身が「鶏を育て出荷した人間」「(内部事情を)知っている人間」「関係者」として、「責任」「義務」「使命」があるからだと考えていることが分かる。そのため、告発することは「正しいこと」であると信じられ、それこそが告発する原動力になっている。また、キャロルを取り巻く人間関係にも想像力を働かせ、頼りになる人がいない(体力や気力がない、保身のために動けない)から自分がやるしかなかったと述べている。さらに、鶏に対する「あんな扱い」「あんな育て方」が許されるとは思わない、好きになれないとしたうえで、それと対比した形で告発した後の生活について語っている。生産者としても消費者としても告発した企業とはかかわらないと決意し、「企業に縛られない自然な育て方＝少しでも安全な、健やかなニワトリを育てて生きたい」というオルタナティブな生き方に考えが及んでおり、これが自分にできる抵抗だと述べている。

柴田ほかによると、自分を他者の立場に立って捉えることにより、自分の考え、価値観、自己洞察や気づきが生まれやすいという。ロールレタリングは自己と他者という両者の視点に立ち、手紙を書くという主体的行為であり、自分の考えを目に見える形で明確に表現できるツールである[29]。当初、A さんは「私→キャロル(往)」のロールレタリングにおいて「ずっと耐えて自分の身をすり減らす方を選んでいたと思う」と述べていた。これはその時点で A さんの中に出来上がっていた「世界は所与のものであり、変えることはできない」という A さんの思考の構造である。それが「キャロル→私(復)」のロールレタリングにおいて、自分と異なるキャロルという立場に身を置くことによって、新しい視点を獲得することができ、新しい視点から事態を見ることが可能になっていると考えられる。

先述した第 12 回の「4 つの問い」において、A さんは自分のアイデンティティを「多少の知識と、ほんの少しの当事者意識を持つ世界との関係者」と捉えながらも、「対策を考えようとするが、思いつかない世界の構成員」と認識しており、どのようにつながり方を変え、社会に働きかけるかに対する対策までは考えられていない状態だった。しかし、ロールレタリングを通して、キャロルという新しい視点から生き方の選択や判断について自己内対話

をすることで、A さんの思考の構造に気づくことができ、既存のルールに従わない別の生き方への意志を作ることが可能になっている。

第 14 回は、ロールレタリングをペアで共有し、キャロルさんが告発後、どのように生きているかを映像で確認しながらキャロルさんの生活がどのように変化しているか考えた。以下は授業で使ったスライドである。

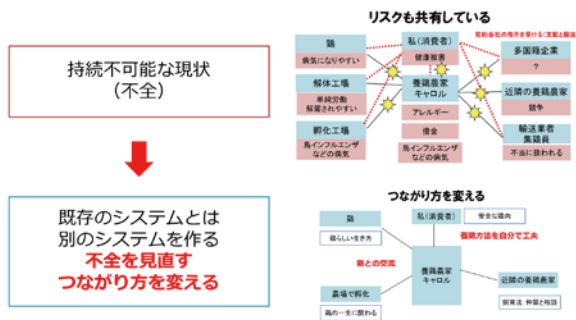


図 6 第 10 回のスライド

第 14 回と第 15 回では、既存のシステムとは別のシステムを作る人々に関する記事や映像（下請けにならない農業、小水力発電）を通して、持続可能に生きるための具体的な取り組みについて考えた。例えば、小水力発電で地域再生に取り組む平野彰秀さんの生き方を取り上げ、どのように現実を捉え、その現実を変えるために何をしたかを一緒に考えた。平野さんは 2007 年ごろから、大量生産大量消費で物を作るということや、エネルギー問題、地球温暖化といった世界中が抱えている社会的な課題に対してどのように向き合うべきか考えはじめ、外資系コンサルタントという自分のキャリアを見直し、家族と一緒に U ターンして岐阜県の石徹白で小水力発電や昔ながらの衣服製造など社会に対する課題から生まれた事業に取り組んでいる。石徹白の持続不可能な現実のつながり方を変えることによって、自治再生と新しい社会モデルを実現していることをペアで確認するタスクを行った。受講生がタスクシートに書いた文章をスライド（図 7）にまとめて第 15 回の授業で共有した。

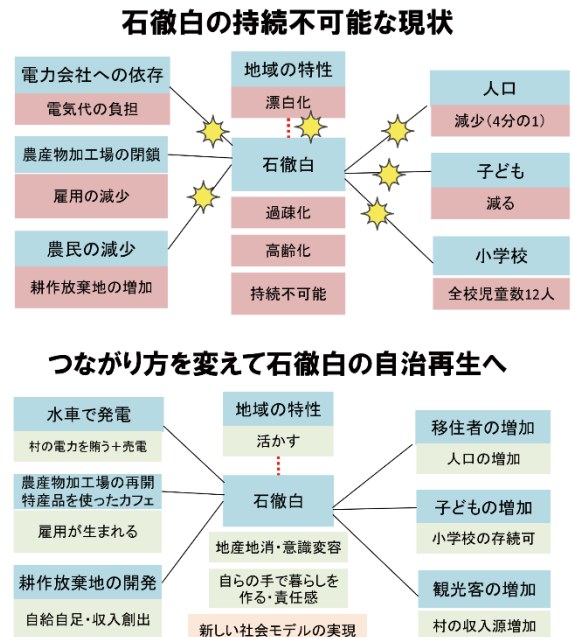


図 7 第 15 回のスライド

すべての授業が終了した後に、最終課題として「4 つの問い」に答えてもらった。以下は A さんの 4 つの問いの記述である。

【第 15 回のあとの A さんの「4 つの問い」】

① 世界はどうなっているか

資本主義と、新自由主義の浸透した世界で、利益目的のため、商品の大量生産を行い、生産のための原材料を自分から遠い人件費の安い発展途上国に求めた。その結果、深刻な環境への被害を与え、多くの異常現象が発展途上国のみならず、自分たちの住む先進国にまで発生するようになった持続可能どころか、存続困難な深刻な状況にある。また、人々は、初めから資本主義、新自由主義のルールに規定されているため、世界持続のための行動がしづらいと認識している。

② その中でどちらに向かって歩んでいくか

その世界の中で、資本主義、新自由主義の苛烈な大量生産・大量消費を行わない、責任転嫁をしない、新たな規定がある、伝統的な自然との共存を図ろうとする持続可能な社会の方向へと向かって歩んでいきたい。（普段の第三次産業が多すぎる、便利な生活から、将来の農業、畜産などの第一次産業が増え、第三次産業に利益の大半を取られない社会）その社会では、教員などの人に教える仕事に就き、自然の共存の仕方、考え方を教えるとともに仕事の傍らに保全活動を行いたい。その理由は、考えることの重要性を学んだことによって、考えることの意義を教えたいと思ったからであり、自分に向いていて、自然との共存に寄与することが出来ると思ったため。

③ 他の人とどんな関係を作っていくか

その仕事をする中で、生徒のみならず、生徒を通じて地域の人や保護者との間に、「助けてくれる」と信頼できる、不正の行えない透明度の高い関係性を作り、自然への敬意や、自分の行いに責任を持って行動する、堅実な生活を送る「現実」を作っていく。

④ 自分とは何か

私は、資本主義社会や新自由主義の規定に、生まれたときからはめ込まれていた、持続できないほど深刻な環境状況にある世界を、他国で環境破壊を行う企業の商品を何も知りも、考えもしないで購入し、消費することで間接的に環境破壊に加担し、その代償を支払う義務を持つ加害者であり、被害者。自分は世界に繋がれていると感じていた人間。しかし、様々な知識や考え、事例を見て考えることで、無知で考えなしの加害者兼被害者兼消費者から、自分から知ろうと、考え行動しようとする、新たな規定を作りうる可能性を持つ人間。

第 15 回後の 4 つの問いの回答で、A さんは新自由主義的な資本主義の問題点をグローバリゼーションの下「先進国」と「発展途上国」の構図という新しい視点に広げてとらえていた。人件費や原材料の安い開発途上国で大量生産をすることで現地の環境を破壊するだけでなく、気候変動などの異常現象につながり、先進国の自分たちにまで影響が及ぶと述べている。これは自分とキャロルさん、アボカド農場の人々との関係を拡張して考えたものであると考えられる。

また、第 12 回では「持続不可能」と捉えていた世界を「存続困難」という言葉で表していることから、深刻な状況に対する A さんの危機感が窺える。注目すべきは、人々が「初めから資本主義、新自由主義のルールに規定されている」ため、行動しづらいつと認識しているという気づきである。つまり、人々にとって新自由主義は所与のものであり、人がその意志で変えることはできないと信じられている。A さん自身もそのような認識を持っており、キャロルさんへのロールレタリングでは、「ずっと耐えて自分の身をすり減らす」生き方を選ぶと述べており、第 12 回後の 4 つの問いでは「対策を考えようとするが、思いつかない」と困惑していた。しかし、第 15 回においては、大量生産・大量消費、責任転嫁の原理が働く「新自由主義のルール」に代わる「新たな規定＝自然との共存を図る持続可能な社会」の方向に向かって歩みたいという決意表明をしている。具体的には「教員などの人に教える仕事」に就

いて、「自然との共存の仕方、考え方を教えるとともに仕事の傍らに保全活動を行いたい」と述べており、第 12 回よりさらにつながり方を変える方向で具体化されていることがわかる。この考え方は第 14 回と第 15 回で取り上げたキャロルさんや平野さんの生き方から大いにヒントを得たと考えられる。

さらに、そこで築く人間関係も第 12 回では「運命共同体」という、マクロでやや漠然としたものであったが、第 15 回ではよりミクロで自分の将来のキャリアに直接関連しそうな「生徒」や「保護者」、「地域の人」を挙げている。その中で A さんは堅実な生活を「自然への敬意」「自分の行いに責任を持って行動する」ものとし、不正がなく信頼できる関係性を作りながら生きていきたいと述べている。

ここまでの認識を踏まえて A さんは、「新たな規定を作りうる可能性を持つ人間」と自分自身を定義している。これは既存の構造である「新自由主義のルール」に規定されないで、逆に既存の構造を規定し直す、即ち行動を起こし「新たな規定」を作って世界を変革し得る主体としてのアイデンティティーである。

ここで、第 1 回目の授業で行った幸福論に戻って考察する。A さんは、幸せを感じるのには「考えなくてはならない、憂慮しなくてはならない事柄を考える必要が無い状態」であると答えており、それは単なる「現実逃避」の可能性があると考えていた。第 15 回の 4 つの問いへの答えで、A さんは将来のキャリアとして「教員などの人に教える仕事」をあげており、その理由をについて「考えることの重要性を学んだことによって、考えることの意義を教えた」と述べている。この発言から A さんが「考える」ことに大きな意味を見出していることがわかる。

第 5 回、第 12 回、第 15 回の「4 つの問い」の分析から、世界認識の広がり多様化、それに伴う行動基準、人間関係、アイデンティティーの広がり、精緻化する様子が確認され、A さんの生態学的主体性の形成が遅々としてではあれ着実に進んでいることが分かった。「4 つの問い」というツールを通して持続可能な生き方を考えるということは、あるゴールを想定し、そこに向かって一直線に進むことを目指しているわけではない。A さん自身も述べているように、「様々な知識や考え、事例を見て」考えつづけることが重要である。但し、その知識や事例を単に理解にとどめては意味がない。「これから自分がどう生きるか」を考えるための手がかりになる形で、自分との関連を見出し、「世界を組み立てて

いる言葉」[13]を獲得していくのがポイントである。自分の生き方とつなげて事態を見ることで、「無知で考えなしの加害者兼被害者兼消費者」という A さんの自己に対する気づきのように、自分もその世界を形作っている一員であることに気づくことで、「自分から知ろうと、考え行動しようとする」という生態学的主体性の形成にはゴールはない。4 つの問いに答えていくのは生涯を通して取り組む課題といえる。

4. 2 共起ネットワーク

る名詞の共起ネットワークに関する分析結果を「4 つの問い」の問 1 から問 4 の順で示す。

図 8 は第 5 回と最終レポートの問 1、図 9 は問 2、図 10 は問 3、図 11 は問 4 で多く出現した名詞の共起ネットワークを示している。四角の枠の中の数字は共起の強さを表す Jaccard 係数である。樋口ほか(2022)では、Jaccard 係数が 0.1 を超えていればある程度の共起があった、0.2 以上なら「それなりに強い共起があったと見なせそう」(p.124)だとしているため、本稿では 0.2 を基準として、Jaccard 係数が 0.2 以上と 0.2 付近の名詞に着目する。

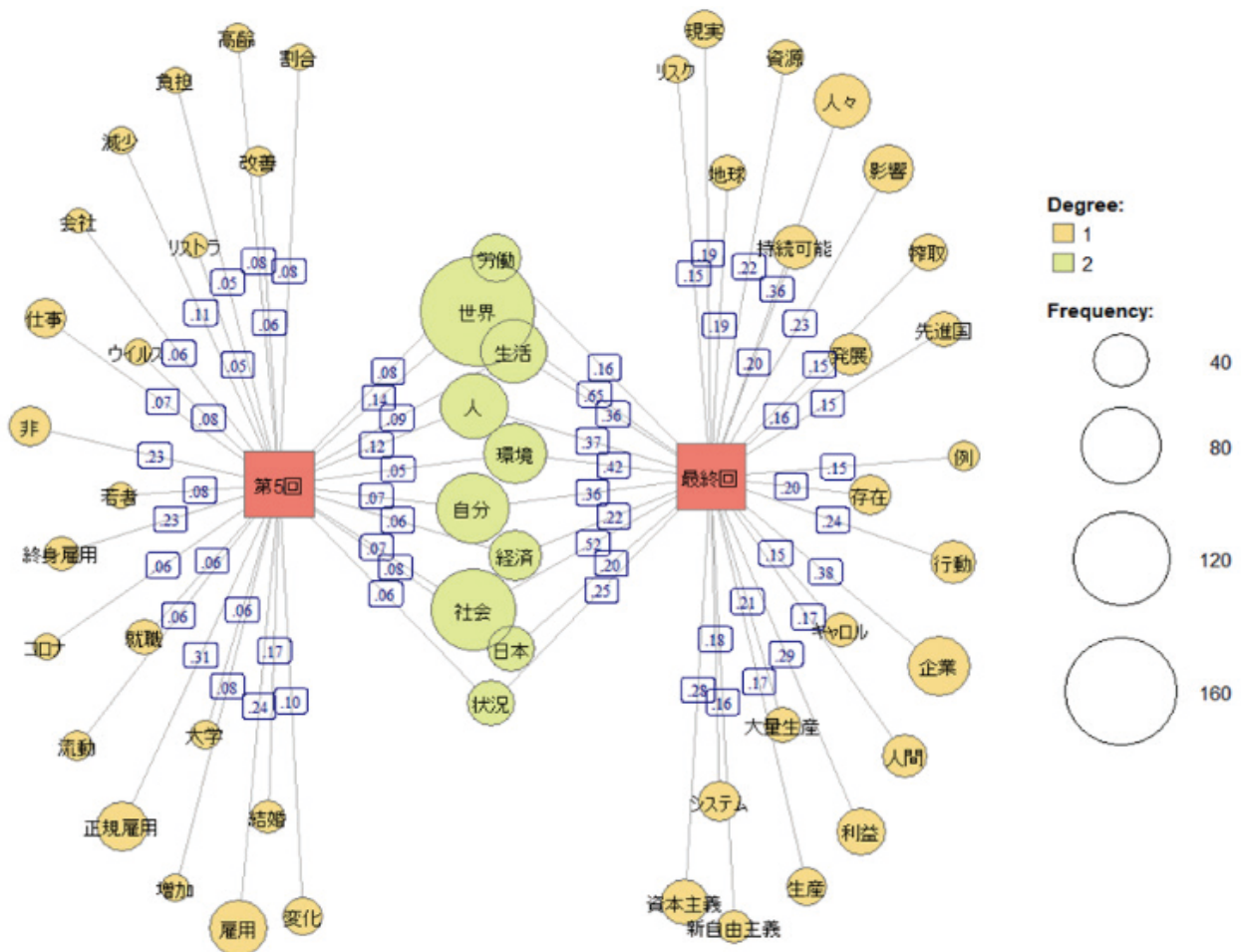


図 8 問 1 で使用された名詞の共起ネットワーク

4. 2. 1 問 1「世界はどうなっているか」

図 8 で左側に並んだ語は問 1 について第 5 回のみに、右側に並んだ語は最終レポートのみに、中央に並んだ語は第 5 回と最終レポートの両方に

多く出現した語である。

第 5 回では「雇用」「正規雇用」「非(筆者注:受講生の記述を確認したところ、第 5 回の「非」はすべて「非正規雇用」での使用であった)」「終身雇用」といった雇用に関する語彙の共起度が高く、例

1のように、主に、自己が生存するための条件を雇用制度とのつながりで考えていることが読み取れる。以下に学生が書いた文例を挙げ、共起度が高い語を枠線で囲んで示す。

【例1】**終身雇用**制の撤廃、**雇用**の流動化のため、自動化機械化の**雇用**が減っていく、無駄なものなくなる。AIや人工知能が普及、**非正規雇用**のライフコースだと結婚や出産の見通しが立たない。転職するのは当たり前。自分の将来は自分でやっていかなければならない。(第5回タスクシート)

自己が生存する条件として雇用制度が極めて不安定なものとして認識した上で、リスクをどう回避するかは自分で解決すべきものと考えており、なぜそのような不安定な雇用制度となっているのかについては視野に入っていない様子が窺える。

「世界」「社会」「環境」といった語は第5回と最終レポートの両方で多く出現したが、共起度は最終レポートのほうが第5回より高く、また、最終レポートでは「企業」「人々」「資本主義」「利益」「行動」「影響」「資源」「持続可能」といった語彙の共起度が高い。最終レポートにおけるこれらの語の使用例を例2に示す。

【例2】この**世界**では、個人レベル及び**企業**などの集団レベルで**資本主義**を前提とした富や財産の囲い込みなどの自己中心的な考えに基づいた**行動**や計画が行われており、自分たちの**利益**しか捉えられていないため、その**利益**を重視した**人々**以外の市民や住民などが被害を被ってしまうこととなり、その結果**持続可能**な生き方や**社会**から遠のいてしまっているのが現状である。しかし、その中でも集団レベルから離脱し個人レベルで新たな持続可能なシステムを生み出し、この社会全体を巻き込んで変えようとする人々も続々と出てきており、その人々が我々とのつながりを結びつつ、徐々に変わっていきこうとしている。(最終レポート)

上述したとおり第5回の時点では、学生は自己が生存するための条件として雇用制度を中心に世界を認識していたが、最終レポートでの共起度が高い語とその使われ方を見ると、社会・世界のありようを、自己を含む人々や環境の持続可能性と企業・資本主義との関連性及びシステムとして認識し始めていると解釈できる。

4.2.2 問2「その中でどちらに向かって歩んでいくか」

図9は、第5回と最終レポートの問2で多く出現した名詞の共起ネットワークを示した図である。図2で右側に並んだ語は第5回のみ、左側に並んだ語は最終レポートのみ、中央に並んだ語は第5回と最終レポートの両方に多く出現した語を示している。

第5回では全体的に共起度の高い語が少ない。共起度が0.2に近いのは「正規雇用」と「正社員」の2語のみで、次いで高いのは「能力」である。これらの語の使用例である例3や例4を見ると、自分自身が「正規雇用」された「正社員」になるために必要な能力を身につけるという意志が表明されていることが窺える。

【例3】非正規雇用ではなく**正規雇用**になるための**能力**などを身につける。(第5回タスクシート)

【例4】**正社員**になるための資質を身につけていく。非正規雇用社員のライフコースは選ばない方向で先の人生を考える。**正規**社員になるために必要な**能力**や留意点やについて調べ、準備する。(第5回タスクシート)

上記の例からは、自分は非正規雇用にならないよう、正規雇用に求められる能力を獲得することで、リスクを回避しようとする態度が読み取れるが、非正規雇用が増加する現状を自分が変えようとする主体的な姿勢はまだ見られない。

第5回と最終レポートに共通して見られる名詞には、「生活」「自分」「社会」「世界」「環境」といった語彙があるが、いずれの語も最終レポートのほうが第5回よりも共起度が高く、また、最終レポートには「人」「人々」「持続可能」といった語との共起度が高くなっており、自分の生き方を他者や世界、環境とのつながりで考え始めていることがわかる。そして、共起度の高いこれらの語が使われている例5や例6を見ると、他者や世界、環境と自己とのより健全なつながり方を志向していることが読み取れる。

【例5】過酷な現状があり、生物や**環境**に悪影響を及ぼしたくないことから、地元地域で**環境**や**人々**にも納得できる町づくりに専念したい。地元の良さを引き出し、**環境**、**人**にも良い状況をつくりたいと考えている。(最終レポート)

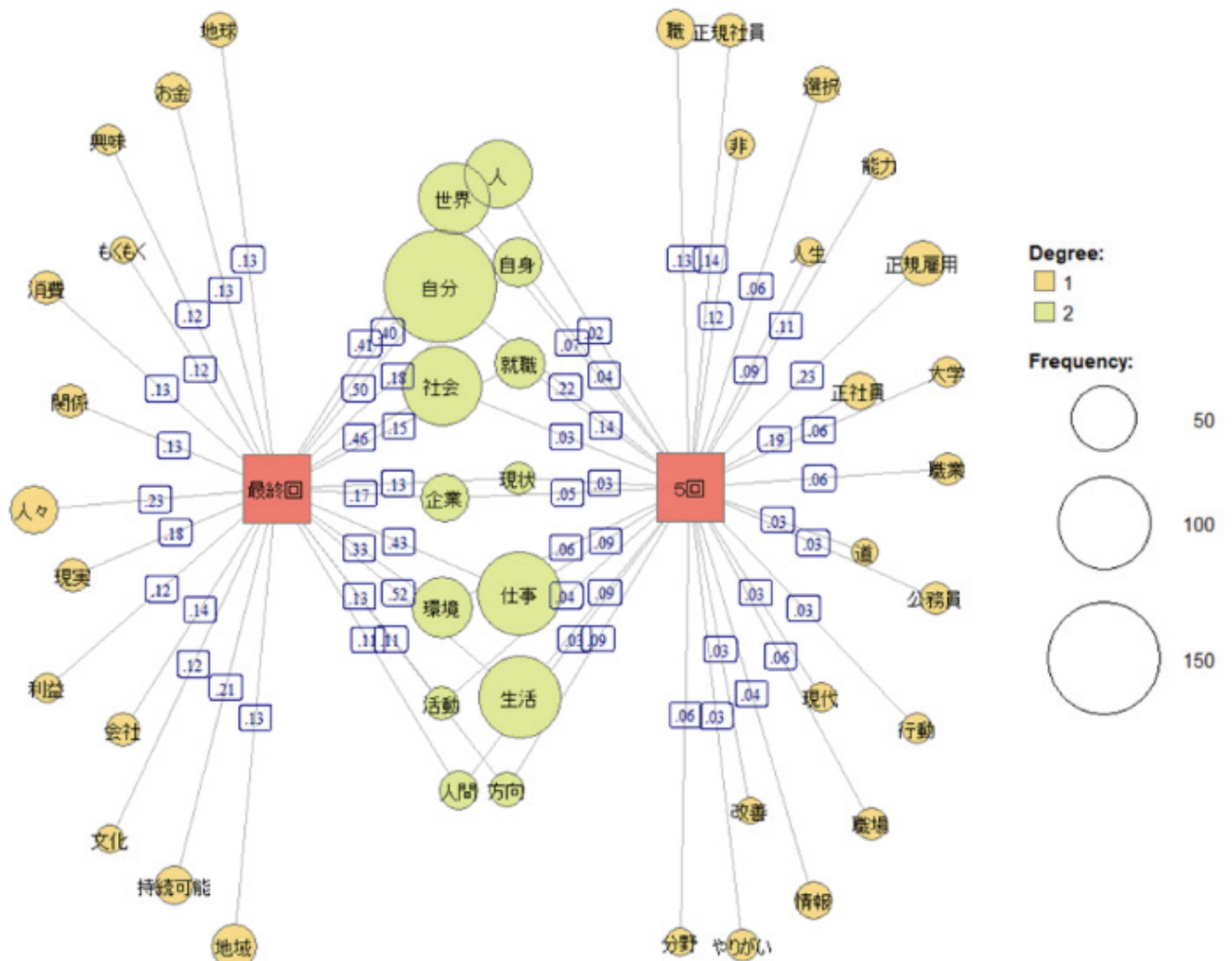


図 9 問 2 で使用された名詞の共起ネットワーク

【例 6】私は、その中で持続可能な生活を送っていききたいと思う。(中略)私は、生活していく中で、なるべく無駄をなくして、自分の使うだけの量を購入していきたいと思う。(最終レポート)

4. 2. 3 問 3「他の人とどんな関係を作っていくか」

図 10 は、第 5 回と最終レポートの問 3 で多く出現した名詞の共起ネットワークの図である。図 9 で右側に並んだ語は第 5 回のみに、左側に並んだ語は最終レポートのみに、中央に配置された語は第 5 回と最終レポートの両方に多く出現した語である。

第 5 回では共起度が高い語がないが、使用頻度が比較的高かった語として「お互い」「交流」「相談」「尊重」「職場」「仲間」などがあり、以下の文例

のように、職場の仲間と交流したり相談したりしながらお互いに尊重し合う関係を作りたいと望んでいる傾向が見える。

【例 7】職場の人たちとはお互い協力したり、相談できる良好な関係を作っておく。

【例 8】互いに尊重し合う関係性を重視していきたいです。

【例 9】先輩方や同期の仲間達と良好な関係を築いていく。(以上、第 5 回タスクシート)

第 5 回と最終レポートの両方に見られる語として「人」「社会」「人間」「仕事」「世界」があるが、いず

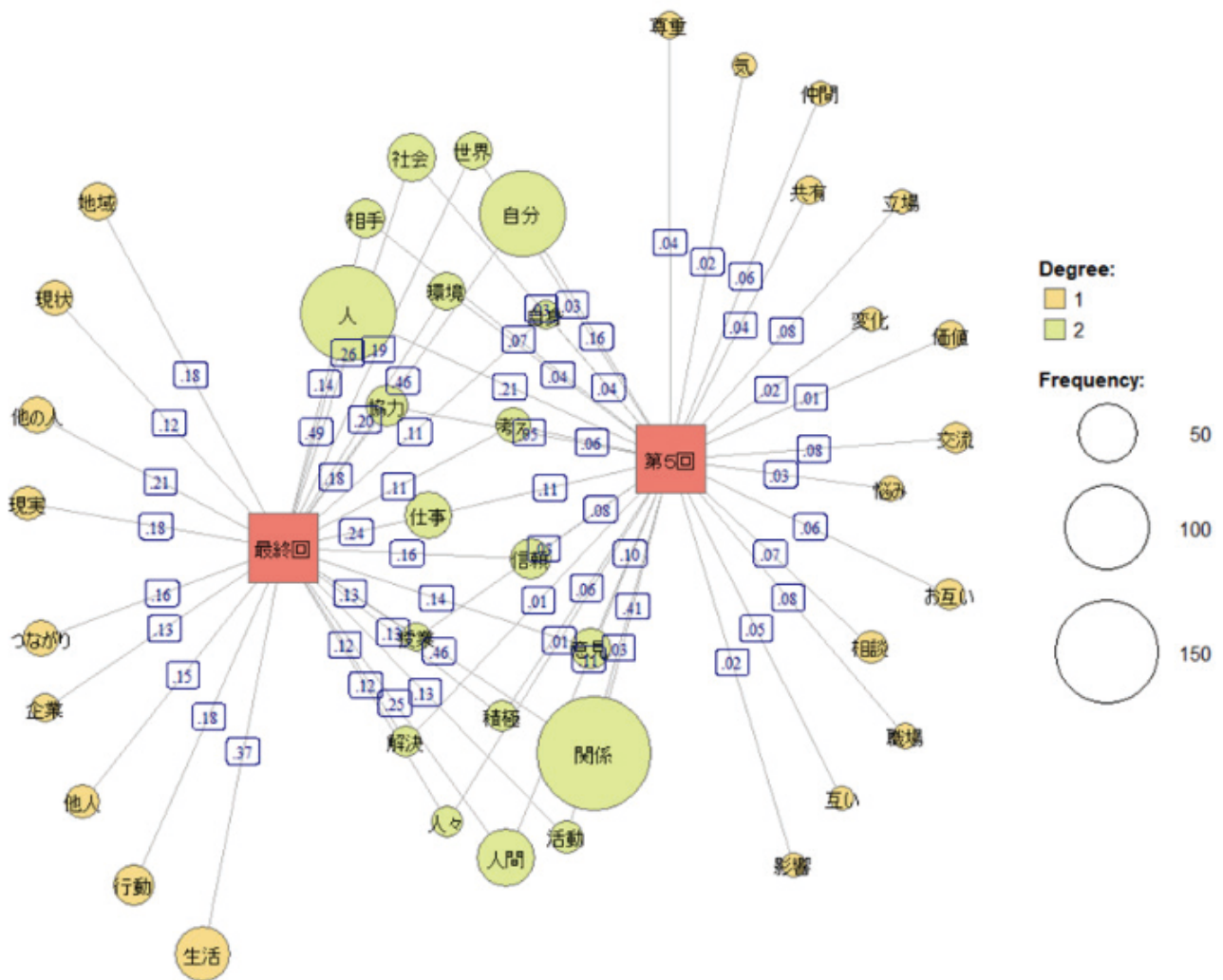


図10 問3で使用された名詞の共起ネットワーク

れの語も第5回より最終レポートのほうが共起度が高く、「人」「社会」「人間」「仕事」「世界」の中身も異なる。

【例10】そのため私がどちらの雇用形態であったとしても社員同士協力し助け合いながら「仕事」ができるように、積極的にコミュニケーションをとり協働できるような関係づくりを心がけたいと思う。(第5回タスクシート)

【例11】立場関係なくお互いに平等であり、良好なコミュニケーションを取っていきたいと思っている。そして教育の「仕事」に就くことで一人一人が「世界」の一員であり大量生産・大量消費を生むという認識を持ってもらい、これからの生活に少しでも環境に配慮した行動をとるようにしていきたい。(最終レポート)

自分が他者とどのような関係を作りたいかにつ

いて、第5回の例10では、他者を自分とともに働く仲間として捉えることにとどまっており、「仕事」と自己の生きる世界の関連については述べられていない。

一方、最終レポートの例11では、「環境に配慮」と述べており、「生の生物学的ネットワーク」(バトラー 2015)として自己と他者との関係を考え、自分の「仕事」を通して、自己および他者(みんな)にとって生きやすい社会・世界の創造を視野に入れて「仕事」を考えていることが読み取れる。

また、最終レポートでは「生活」「他の人」「地域」「現実」「行動」といった語の共起度が高く、身近な地域で他者とともに問題解決のための行動を起こし理想に向かって現実を作っていきたいと考えていることが次の例12からも窺える。

【例12】地域の中で再生可能エネルギーや地域ブランドを作るには自分だけでは成立できないので人とのつ

ながりを大事にして共に行動に起こしたりそれを成功できるようにしたい。大量生産をしている企業の食品でなく地元の食品を購入したり自然を大事にする行動を行うことで周りの人たちも同じような価値観を共有できるように

なり少しずつ世界の貧困や環境問題などといった様々な問題の解決に踏み出せる現実を作っていきたいと考えた。(最終レポート)

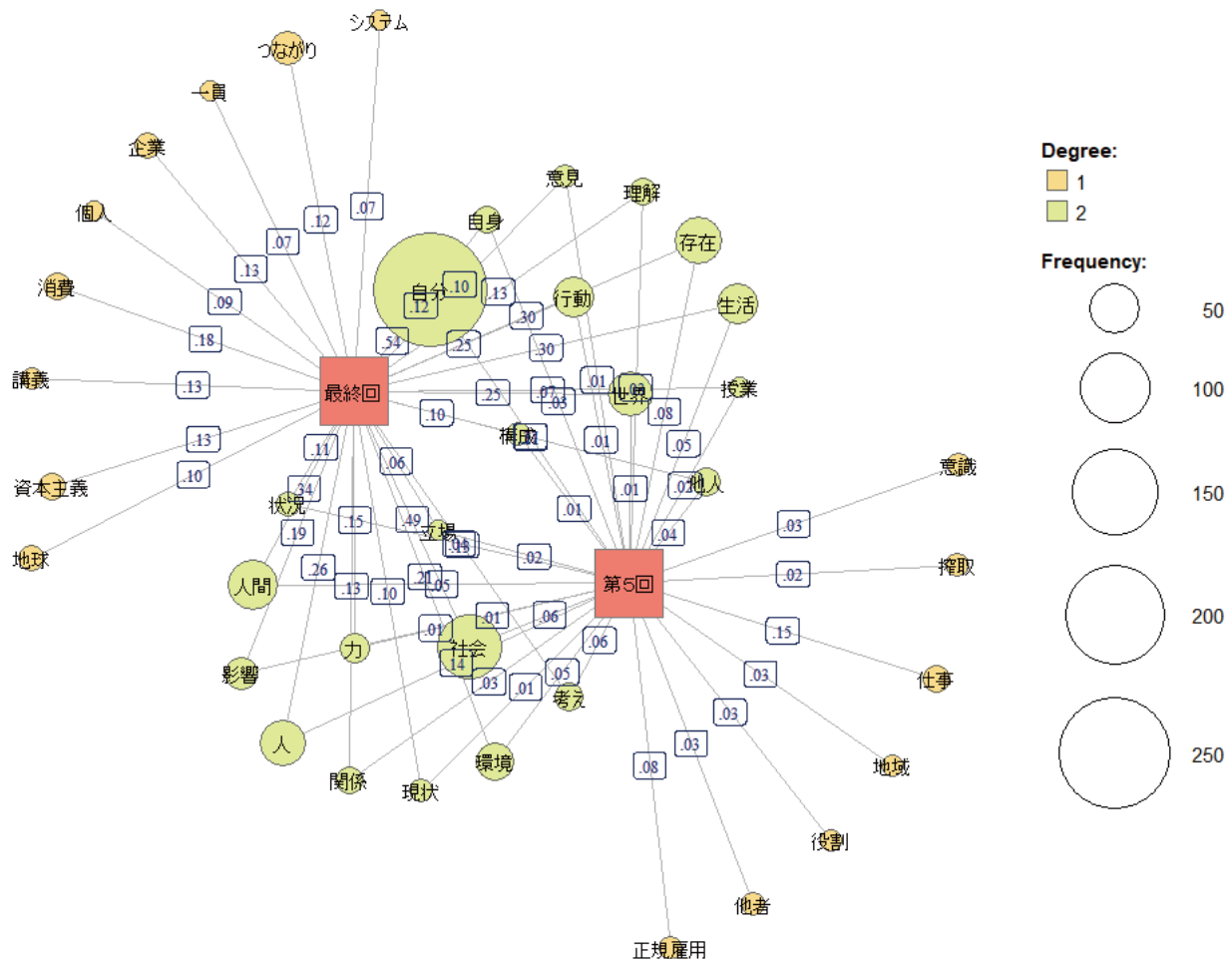


図 11 問 4 で使用された名詞の共起ネットワーク

4. 2. 4 問 4「自分とは何か」

図 11 は、第 5 回と最終レポートの問 4 で多く出現した名詞の共起ネットワークの図である。図 11 で右下に並んだ語は第 5 回のみ、左上に並んだ語は最終レポートのみに、中央に配置された語は第 5 回と最終レポートの両方に多く出現した語である。

問 3 と同様、第 5 回の問 4 では共起度の高い語がない。共起ネットワークに挙げた語として「仕事」「正規雇用」「他者」「役割」「地域」「意識」「搾取」があり、以下の文例からは、正規雇用されることを望んでいるが、搾取される側の人間であると自分を認識している傾向が窺える。

【例 13】搾取されない、きちんと人として扱われる正社員として生きていこうと思っている自分。(第 5 回タスクシート)

【例 14】将来の自立と安定を一番に考えている自分。正規雇用など、働くことへの自分の基準・条件を考えながら将来の仕事について考えている。(第 5 回タスクシート)

第 5 回と最終レポートに共通して見られる語として「世界」「行動」「社会」「環境」「人間」「行動」「生活」などがあるが、いずれの語も最終レポートのほうが共起度が高い。また、最終レポートには「消費」「資本主義」「企業」「講義」「つながり」といった語との共起が見られ、講義をきっかけに、働き方に加

え、自らの消費や生活のあり方を資本主義といった社会のシステムとのつながりで考えるようになったことも以下の文例からわかる。

【例 15】消費者であり、社会に貢献できる人間である。またより良い生活をするためにはどうしたらいいかを、考えることができる。そしてこれからの社会を支えていくためには何が必要かを、この授業で学んだことを生かして役立てることができる。
(最終レポート)

【例 16】私は、資本主義社会や新自由主義の規定に、生まれたときからはめ込まれていた、持続できないほど深刻な環境状況にある世界を、他国で環境破壊を行う企業の商品を何も知りも、考えもしないで購入し、消費することで間接的に環境破壊に加担し、その代償を支払う義務を持つ加害者であり、被害者。自分は世界に繋がれていると感じていた人間。しかし、様々な知識や考え、事例を見て考えることで、無知で考えなしの加害者兼被害者兼消費者から、自分から知ろうと、考え行動しようとする、新たな規定を作りうる可能性を持つ人間。(最終レポート)

5. 総合的考察

ここではまず、4つの問いそのものとその基盤となる生態学的主体性とは何かについて述べる。次に、本実践の成果をまとめ、最後にそれを踏まえて、本実践の各活動の意義を考察する。

5.1 生態学的主体性とは何か？—4つの問いとの関連で規定する—

まず、4つの問いを改めて以下に示す。

- ①世界はどうなっているか。
- ②どのような行動基準に沿って生きるか。
- ③他者とどのような関係を作り上げていくか。
- ④自己とは何か

4つの問いに基づいて、自己および世界を捉えようとする場合、自己が現在直面する問題をどのように解決すればいいかを考えることが認識の出発点つまり、認識の端緒となる。

そのような自己の起点を出発点として、「世界はどうなっているか」の問いに基づき、世界のコト、モノ、人と自分とのつながりを、自己の今の生活のもとで直面する問題とつながると言う意味での自己とそのつながりとの関連つまりレバヴァンスに注目し

て捉えていく。

そのような認識のプロセスで見えてくるつながりを、そこで、コト、モノ、そして、人と言う形で登場する人々の経験している事柄を追体験しつつ、それを通してそれらの人々と自分、そしてそれらの人々の生活と自分の生活をつなげて考え始めていく。

それらのプロセスで同時に並行して、認識の端緒である「自己が現在直面する問題をどのように解決すればいいか」の問いに対する自分なりの解決方法は何かをたどっていく。

その中で、合わせて、つまり世界に存在する様々な人々の追体験を通じて以上の過程をたどっていく中で、自分がとるべき行動基準とは何なのか。何に基づきどのように生きればいいかを探求していく。

そのようなプロセスを通じて、少しずつ見えてくるその行動基準を、自己の今後生きるべき基準として踏まえる中で、同時にさらに並行して、「自己とは何か」と言う問いを設定する。その上で、世界のそれらの人々、そして自己と同時代の、根底においてつながっている生活を共有しているように見え始めてくる人々が直面している問題に気づき、それを自己の問題として捉え始める。そしてこれを考え、深めて行く。

以上を振り返ってみると、認識の端緒であった、自己が現在置かれている現実の中で直面している問題について、上でたどってきている他の人々の生活を追体験することで、自分が直面している問題と彼らが直面している問題の間には共通する部分があるということが少しずつ見え始めてくることが分かる。

以上を経験することを通じて、彼らと共有している現在の現実が、自分の問題と具体的にどのようなつながっているか、漠然とした気づきに始まって、少しずつその内実がはっきりしてくる。

こうして、自己との関連つまりレバヴァンスのつながりを振り返る中で、人々が直面している様々な問題を、ほかならぬ自己の問題として捉え始める。つまり、自己の問題として捉える機会を少しずつ得ることによって、「自己とは何か」、それらの人々と、どのようなつながりのもとに生きているか、が少しずつ見え始めてくる。そしてそれはさらに、同時に並行して、「他者との関係をどのように作り上げていけばいいか」の問いをたどるプロセスともなっていく。

ここで生態学とはどのようなものかについて改めて考えてみよう。生態学のベースをなすものは、世

界はどのようなつながりのもとに存在しているか、自然世界はどのようなつながりのもとに存在しているかを探求することである。自然生態学は自然世界に焦点を当ててこれを考える。その自然生態学とは別に、人間社会を人間生態系として捉える人間生態学は、自然世界に取り囲まれながら存在している人間のつながりがどのようなものであるかを問うものである。より厳密に言えば、「人間世界を形作っているコト、モノ、人のつながりはどのようなものであるか」を問うものである。またその問いに基づいて行動し、つまり実践していくのが、実践の学でもある人間生態学である。

人間生態学の枠組みの下で、世界に関する 4 つの問いは問われる。その 4 つの問いの最も根底に置かれる問いが「自己とは何か」の問いである。言い換えれば「自己と言う主体とは何なのか」の問いである。その問いの最も根底に置かれる「自己と言う主体」が則るべき行動基準に関する問いが「いかなる行動基準のもとに生きるべきか」である。

以上のように第一に、生態学的主体性とは、「自己とは何か？」を根底に据え、究極的には「どのような行動基準のもとに生きるべきか」を追求していく主体の下に形成されるもの、と言う意味での主体性である。

第二に生態学的主体性とは、第一の主体性によって規定される自己が、上で述べたようなプロセス、すなわち、自己の直面する問題と言う認識の端緒に始まるプロセスを踏んで「世界はどのようなになっているか」と言う問いのもとに世界のつながりをたどって行く過程、そしてそこから実践の指針「そのもとで、どのような行動基準のもとに生きるか」の答えを得るための探求を進めていく過程で形成されて行く主体性である。

第三に、生態学的主体性とは、第一の生態学的主体性と、第二の生態学的主体性の規定に基づき、「(世界に自己との間で問題を共有しつつ存在している)他者との関係を、どのようなものとして築いていくか」の答えを得るための探求を進めていく過程で形成されて行く主体性である。

5.2 本実践の成果:生態学的主体の形成に向けて踏み出した確実な一歩

本稿は、自己と自己を取り巻く社会(環境)とのつながりを認識することで、世界を組み立てている言葉を獲得[13]しながら、そのつながりに不全がある場合はつながり方を変え、変革していくことで持

続可能な生き方を模索する主体を生態学的主体性[14]と呼び、この生態学的主体性の形成をめざして行った教室実践の報告である。

上で述べたように、生態学的主体の形成過程は一直線ではなく螺旋的である。この活動の結果としてこの結果を得たことを以て変革に向けた主体が形成されたと断じることができない。また、一つの原因をクリアしたから即その結果が成果として示されるものでもない。私たちがその中で生きているつながりは、自己を起点にして辿る時、例えば、他者の追体験を通して、少しずつ見えてくる。様々な他者の追体験を積み重ねる中でつながりの全体像が少しずつ輪郭を表してくる。その意味では極めて漸進的なプロセスでありかつ行きつ戻りつ、そしていった螺旋的なものである。そして、このようなプロセスを経る時そのつながりのどこかに繋がっている自分が少しずつ見えてくる。そして、そこに現実変革に向けた動機と意志が生まれ、その意志が少しずつ強化されていく。一生を通したこの継続が持続可能に生きることであり、新たなキャリア教育が目指すものである。本実践の分析結果はこうした主体性形成に向けた漸進的で螺旋的なプロセスを具体的に示すことができた。受講生が各活動を通して、「自己と自己を取り巻く社会(環境)とのつながりを認識することで世界を組み立てている言葉を獲得」[13]していることが明らかになった。新たな言葉の獲得は、それまで見えていなかったつながりの可視化であり、自分がどのようなつながりの中にいるかを知ることであったと言える。さらに、つながりが可視化されることで、そのつながりに対する自身が持つ価値観に気づき、さらに活動を続ける中で、その価値観が鍛えられ、持続可能に生きることに向けての意志が強化されていったことが分かった。以下では、なぜ、受講生は生態学的主体性の形成に向けて確実な一歩を進めることができたか、さらに考察を進めたい。

5.3 自己を起点にした活動と 4 つの問い

どう生きるかを主題とするキャリア教育においてはその出発点は自己である。人がどう生きるかはその当人が決め、その結果も当人が引き受ける。本実践では、そのことの徹底として、自己とは何かという問いを基本に据え、自分仕立ての生きる枠組みを作ることに向けて、活動を組織した。つまり、多くの大学で開講されている知識科目のように学ぶべき目標知識があり、その知識の効率的な獲得

に向けて授業活動を組織する形を最大限排除した。

大学の現場では、就職対策として自己分析が奨励されている。分析した自己によりよくマッチする業種を選択しようという趣旨である。この自己分析と上に述べた「自己を起点にする」とはその寄って立つ基盤がまるで違う。前者は自己と外(環境)は相互に自立したものとして捉えられている。一方、後者は、自己と外は相互交渉関係にありしかもつながりのなかにいると捉える。比喩的に言うと、前者では、自己分析→自己探し→自己に合致した職業(人生)となる。そこでは、専門家やAIの導入などによる効率化が目指される。先に述べたような本実践の特徴である、自己から他者へ、他者から自己へと拡張として漸近線螺旋的というプロセスを主導するといった展開は見られない。

それでは、タイムパフォーマンスを重視し効率性の追求に馴染んでいる受講生が何故、漸近線・螺旋的というプロセスに真摯に取り組んでいったか。本論で述べた活動記録から分かるように受講生は各自真剣に活動に参加していることが見て取れた。その理由としてここでは、(1)クラスサイズ、(2)シラバス、(3)4つの問い、の3点を取り上げる。

(1)クラスサイズの大きさ:大人数クラス

本実践が行われたクラスは80人という大きいクラスである。一般的にはグループ活動には教師の目が届きにくいことから不適切と言われるサイズである。しかし、本実践の結果はその説の一般化は危険だということを示した。本実践で採用した活動は何れもグループ活動が基本となっている。自己を起点としたつながりを辿るためには、他者の存在は絶対だからである。しかも、クラスサイズが小さいと、その重要な他者の数が物理的に少なくなり、いっぺんに活動が低調になってしまうであろう。クラスサイズは正しい知識の理解や定着が目的の場合は教師の目の届く範囲のグループが可能なクラスサイズが適切であろう。しかし、本研究のような、他者の経験や意見の追体験自体が目的になる場合には多様な他者が得られる点でクラスサイズはむしろ大きい方がいいと言える。

(2)シラバス

繰り返しになるが、本実践の目標は生態学的主体性の形成にある。ここで改めて、生態学的主体性を確認すると、第一に、自己と自己を取り巻く社

会(環境)とのつながりを認識することで、世界を組み立てている言葉を獲得する主体である。そして、第二に、そのつながりに不全がある場合はつながり方を変え、変革していく主体である。最後に、この二つを通して、持続可能な生き方を模索する主体である。本実践のシラバスでは、自己を起点にした特徴的な活動がこうした主体性形成にあたって特に意義があったと考えられる。以下で詳しく述べていく。

自己を起点にする

本実践で採用されたシラバス(表1)から分かるように、どのようなトピックをどのような順序で取り上げるか、を決める基準は自己を起点にすることである。具体的には、大学生である受講生にとって卒業後の進路選択は自分の生きることと密接に結びついている課題だと考えられる。そして雇用なしに生きるケースは多くの受講生にとって稀であり、殆どは雇用であることから雇用を取り上げた。そして、この雇用を出発点として、次に、生きるためには欠かせない食料へと続けた。これは、雇用なしに生きるケースが稀であると同じ理由で、食料の自給が可能な受講生は殆どいないと考えられるからである。最後に、オルタナティブな生き方を取り上げた。生きることを考える時、雇用なしには生きられない、そして、他から食料を与えられない限り生きられないという受講生が生きている社会は、その事実を直視するなら、極めて厳しい社会である。本実践では、自分を取り囲む、あるいは自分がその一員である、つながりでできている社会を捉えることを目指した。従って、この社会を構成しているコト、モノ、人のつながりが見えてくれば見えてくるほど、本論で述べた受講生たちのように、厳しい社会の現実(、被害者で同時に加害者、拡大する格差や深刻化する気候危機など社会の不全)に直面して、その前でたじろぎ途方に暮れることになる。そのことを見通して、食料に続いて、最後には、コト、モノ、人のつながり方を変えることで、不全をただす生き方をしている人々の群像をオルタナティブとして取り上げた。これは、本論で示されたように、受講生に確かに社会はコト、モノ、人のつながりでできていること、そして、そのつながり方を少し変えることで、社会の不全をただす方向へと自身がモメンタムを作れるかもしれないということを実感させることができた。その点から、雇用→食料→オルタナティブな生き方は意義があると言える。

特徴的な活動

本実践で採用された活動は何れもその目的は他者の追体験をすることによって、自分には見えていなかった新たなコト、モノ、人のつながりを辿ることである。それは一般的には視野の拡張と言われるものであるが、視野の拡張は単に拡張という現象をさしているに過ぎない。ここでは、自分もその一員である社会の全体像を可視化し、自分がどこにつながっているか、自分が直面している問題の解決には自分のつながり方をどうつなぎ変えていくかを見極めることが目的である。この点から、以下では二つの活動を取り上げて検討する。

a. つながりの図

グループ活動では、話し合いの結果などを図で表すことは多く、図を作ること自体は受講生にとっても馴染みのある活動であろう。例えば、統計の結果図、あるいは系統樹、また、本稿でも課題 2 で使った共起図などである。しかし、本実践で使ったつながりの図はこのような図とは成り立ちに違いがある。つながりを辿ること自体が目的である。つながりは一方向であるとか、何らかの因果関係や相関関係にあるとか、あるいは対称性があるといった、何らかの規則性が図示されているわけではない。規則性を図にすることに慣れた受講生の場合には慣れが必要になると思われる。

しかし、逆に、この図を作ることを通して、この社会がコト、モノ、人のつながりでできているとはどういうことかが分かり、さらに、つながりの全体像、社会の作られ方が見えてくる。同時に、我々もこの社会で生きており、社会の構成員であることから、私がそのつながりのどこにつながっているのか、も見えてくる。つまり、図の中に示すことができる。

本実践では、幾つかのつながりの図を作っている。ここでは、アボカドの図を取り上げる。図 5 はある受講生が事前課題としてインターネット記事「アボカドは「悪魔の果実」か？—ブームがもたらす環境破壊と難民危機」(六辻 2021)を読んで作成したつながりの図である。この図を作成することで、自分が日本のスーパーで販売されているメキシコ産のアボカドを買って食するとしたら、自分は自分の周りにどんなつながりをつくることになるか。そのことを想像しながら、記事を読み、自分の既有知識に加えながら、つながりを辿っていくことで図ができていったと考えられる。その時、そのつながりを作るコト、モノ、人の間にはどんなつながりがあって、

生産者から私のところまで来るか。

アボカド栽培に直接つながるコトやモノとして、この受講生は、水の大量消費、生産増加、主に熱帯で栽培、難民危機、金になる、輸入解禁を上げている。そのそれぞれが次のつながりをつくっている。例えば、水の大量消費は水不足、汚水、バーチャルウォーター、自然災害増加につながっている。この図から分かるように、つながりは作成者の認識が広がれば広がるほど、図が密になっていく。つまり、私たちをとりまくつながりが幾層にも絡んだものとして認識されていることが示される。

図 5 は、事前課題として受講生が各自で作成したものであるが、グループで書くとすると、さらに現実のつながりに近づいていくと思われる。注目したいことは、受講生各自が自分の認識を図に表すことができることから、一挙に錯綜したつながりが一望の下に現れてくることである。各自が作図に自由にかつ責任をもって関わるができる。正しい関係、適切な答えを図に示すという関りではなく、自分が見えている世界を言葉にするということである。この活動を通して、受講生はつながりを語る新たな言葉を得ることができ、自分たちの頭の中にあるつながりをグループになって寄せ集めることに意欲的になることが期待される。そうすることにより、社会の実相に大いに近づけることが可能となり、生態学的主体性の形成に大きく寄与する活動であることが分かる。

b. ロールレタリング

本実践ではキャロルに対してロールレタリングを行った。A さんが書いた往復の手紙はこのロールレタリングという活動の豊かな可能性を示した。受講生の生態学的主体性の形成過程を一挙に前に押し上げる力があることが分かった。先に書いたように、生態学的主体性の形成は他者の追体験を通して緩やかに進む、遅々とした過程である。A さんが書いた往の手紙では、A さんのその段階の主体(認識)の在りようがそのまま記されていた。養鶏農家のキャロルは契約内容に抗議して契約を打ち切った。この行為に対して、A さんは以下のように質問をたくさん連ねている(何ページ)。

① どうしてそんなに頑張ろうと思ったの？ ② ほかの人たちに任せようと思わなかったの？ ③ どうやって告発できたの？ やっぱ、④ ニワトリの姿を見ていやになった？ 足が折れて死んだニワトリやひよこの選別はどう思った？ いろいろと聞き過ぎちゃった

ね。答えるの、大変かもしれない。でも、最後に一つ答えてほしい質問がある。⑤自分が殺されたり、不名誉なレッテルをはられる可能性を顧みずに告発できたのはなぜ？

これらの質問の背後には A さんの世界認識そしてそれに基づく行動基準があると考えられる。つまり、大企業など社会的な権力に対して庶民が歯向かうと、そこには大きな危険伴うかもしれない。例えば、不名誉なレッテルをはられたり、悪くすれば殺されるとか。これは日本では考えられないことであるが、銃社会であるアメリカではあり得ると想像したかもしれない。重要なことは、A さんにとっては、日本でも権力に挑戦すると命を取られることはなくても、相応の社会的バッシングを想定したかもしれない。それで、おかしい、理不尽だと思っても、他の誰かに頑張ってもらい、自分はその陰に隠れる立ち位置をとるだろうという行動基準である。つまり、生態学的主体性の形成という点から考えると、A さんは現実には不全があるとしても、それを変革するという現実的な意志を持つことには逡巡していることが分かる。

しかし、A さんの復の手紙になると、俄然調子が異なってくる。以下は、4.1.3 から一部抜粋したものである。

①頑張ってこられたのは自分が正しいことをしていると信じられたからだと思う。②ほかの人たちは(中略)、保身のために動けないと思ったから、(中略)⑤自分が動かないと状況が変わらない中で、自分のためだけではなく、他の人のためにも、動かなくてはならないと思ったのよ。私は、命令とはいえ、あの鶏を育て出荷した人間で、知っている人間よ。責任が無いとは言えない。関係者として、あの企業の強行は止めなくてはならないと思った。要するに使命感と義務感に駆られた。責任の前に使命もリスクも関係なかった。だから私は全てを投げうって告発できた。(中略)⑥少しでも安全な、健やかなニワトリを育てて生きたいと思った。企業に縛られない自然な育て方で。(後略)

この復の手紙の書き手は告発したキャロルである。したがって、A さんはキャロルの立場に立って、自分の行動を擁護しなければならない。往の手紙で見たように、A さんは抗議が必要だと認識してもそれは自分ではなく他の人にして欲しいというものだった。従って、キャロルの立場に立って書くことは極めて難しいことだと考えられる。このロールレタリングという活動によって強制的にキャロルの立場

から世界を見ることになったのである。自分の社会的地位を危うくするとしても、それでも抗議という行動をとるとすると、どんな場合だろうかと A さんは考えを進めたと考えられる。その結果が、復の手紙である。手紙から、自分に責任があるのだから、その責任を全うするためには、自分が先頭に立って問題の解決のために闘うのだという明確な意志が伝わってくる。

本論 4.1.3 では、次のように考察した。

ロールレタリングを通して、キャロルという新しい視点から生き方の選択や判断について自己内対話をすることで、(中略)既存のルールに従わない別の生き方への意志を作ることが可能になっている。

強制的に未知の視点からつながりを見ることで、自己内対話が促されることに注目したい。言い換えれば、他者は外部にのみ求めるのではなく、A さんの今回のケースのように自分の内部にも求めることができる。ロールレタリングはそうした機会を提供できる活動であると言える。

(3) 4 つの問い

期間中に三回入れた 4 つの問いに答える活動は本実践の成否を決めた、最も重要な役割を果たしたものである。本論で示したように、四つの問いの記述により受講生は確実に自分の現時点を確認することができ、次に向けて追求すべき方向性に気づき課題を立てることができたことが分かる。それは、今回取り上げた A さんの分析だけでなく共起ネットワークの分析からも明らかである。生態学的主体の形成において、新しい言葉を得ることは第一の課題である。四つの問いに継続して答えることで、世界認識、行動基準、人間関係の何れにおいても、新しい言葉を得ることができた。つまり、見えなかったものの可視化が進んだ。各段階において、自己を含むつながりが広がりを持ち、同時に、その不全さに気づいてその変革に向けた意志が形成されていることが分かった。

これは、例えば、SDGs とは違う側面があると思われる。プラゴミを減らすために、マイバッグやマイカップをもつ取り組みがなされています。しかしこれはプラゴミが多いという結果に対する取り組みであり、原因に対する取り組みではない。何故プラゴミがこのような大量生産されているのか、自己を起点にしてそのつながりを辿ることで初めて有効な

プラゴミ対策に向けての自己の行動指針を決めることができる。その時は、行動指針に留まらず、他者との人間関係においても、何より、自己自身のアイデンティティーがより拡張し他者との共有部分が大きくなっていると考えられる。

6. おわりに

日本の若者は右傾化しているとか、改革を進めようとしている与党を改革政党として擁護し、その与党を批判し反対ばかりしているといって野党を保守だとして解釈しているという声がある。この真否はわからない。しかし、本実践の結果から政治に関わる言葉が殆ど出てこなかったことは注目に値すると考える。「法の支配が特に外交において近年重要視されるようになっていく。たとえば、まり子テキストから日本の職場のブラックに気づいた。しかし、このブラックは企業が一人で実現したことではない。それを支えている法律がある。男女機会均等法を皮切りに、近年は働き方改革の名のもとに様々な労働法の改悪が進められている。また、キーワードプロジェクトで学生たちが取り上げたアボカドのつながりの図においても、多国籍企業の活動を支える様々な自由貿易協定はつながりの中に入っていなかった。受講生たちが新に獲得した言葉である資本主義や新自由主義は所与のものではない、政治を通して合法的に作用しているシステムなのである。また、ドキュメンタリー映画『フードインク』においてもキャロルが抗議したシステムも合法にしているのは政治である。不法に入ってくる難民を、フードシステムを温存するために容認したのも政治である。受講生の目が向きにくい政治をどのようにつながりの中に入れていけるか、残された実践課題である。

参考文献

- [1] Copernicus Services: Copernicus: 2024 virtually certain to be the warmest year and first year above 1.5°C (2024)
<https://climate.copernicus.eu/copernicus-2024-virtually-certain-be-warmest-year-and-first-year-above-15degc> (2024 年 11 月 9 日閲覧)
- [2] 寺本妙子：キャリア教育における主体と自己に関する概念と教育実践上の課題についての一考察. 開智国際大学紀要、21 (2022)、25-37
- [3] 文部科学省：OECD Learning Framework 2030 (2030 年に向けた学習枠組み)、中等教育資料 平成 30 年 5 月号、(2018)、94-100.
- [4] 小玉重夫：教育の質の変化・転換と市民性、グローバル化時代の教育改革－教育の質保証とガバナンス－、東京大学教育学部教育ガバナンス研究会 (編集)
- [5] 松尾直博、柄本健太郎、永田繁雄、林尚示：「生きる力」とエージェンシー概念の検討－中央教育審議会の答申や学習指導要領を中心に、東京学芸大学教育実践研究、16(2020)、147-158.
- [6] 溝川慎一：社会に起きる個性－自己と他者・拡張的パーソナリティ・エージェンシー、東信堂 (2020)
- [7] OECD: OECD Future of Education and Skills 2030. Conceptual learning framework. : Student Agency for 2030. https://www.oecd.org/content/dam/oecd/en/about/projects/edu/education-2040/concept-notes/Student_Agency_for_2030_concept_note.pdf (2019b) (2024 年 11 月 1 日取得)
- [8] OECD: OECD Future of Education and Skills 2030. Conceptual learning framework. : OECD Learning Compass 2030. https://www.oecd.org/content/dam/oecd/en/about/projects/edu/education-2040/concept-notes/OECD_Learning_Compass_2030_concept_note.pdf (2019a) (2024 年 11 月 1 日取得) (=OECD Learning Compass 2030 仮訳 OECD ラーニング・コンパス (学びの羅針盤) 2030)
- [9] オードリ・オスラー、小玉重夫、細川英雄、福島青史：市民性形成と言語文化教育価値観の異なる多様な人々と共に生きるために、言語文化教育研究、17(2019)、2-32
- [10] Buttler, J. : Notes toward a Performative Theory of Assembly, Cambridge, MA: Harvard University Press.(=佐藤嘉幸・清水知子 (訳)『アセンブリ』青土社) (2018)

- [11] 野々口ちとせ、トンプソン 美恵子、鈴木 寿子、房 賢嬉、半原 芳子、佐藤 真紀、三輪 充子、後藤 美和子、小田 珠生、岡崎 眸：学習者と教師の応答的な関わりが生むグローバル化社会で生きるための主体性形成ーリベラル・アーツ科目における教室談話テキストの言語生態学的分析からー、城西国際大学紀要、vol.26 No.2(2018)、23-53
- [12] 岡崎眸：持続可能性日本語教育ー言語教育への生態学的アプローチ 学士課程教育における意義ー、日本語言語文化研究会論集、9 (2013)、1-17
- [13] 岡崎敏雄：言語生態学と言語教育、凡人社 (2009)
- [14] 岡崎敏雄：日本語教育の教室談話テキスト分析ー内容重視日本語教育における教室談話テキスト分析方法論 I 方法論の前提と枠組みー、言語学論叢オンライン版、7 (2014)、1-21.
- [15] 京免徹雄：持続可能な社会の創造に向けたキャリア教育の可能性ーGuichard のパラダイム論を手がかりとしてー、愛知教育大学研究報告、教育科学編、65 (2016)、133-139
- [16] 樋口耕一：社会調査のための計量テキスト分析ー内容分析の継承と発展を目指してーKH Coder official book、ナカニシヤ出版 (2021)
- [17] 野々口ちとせ、岡崎眸、後藤美和子、秦松梅、趙一章、房賢嬉：学部生対象のキャリア教育における対話的問題提起学習の提案、城西国際大学大学院紀要、23 (2020)、59-78
- [18] 前田信彦：キャリア教育と社会正義ーライフキャリア教育の探究ー、勁草書房 (2022)
- [19] Jean Guichard : Quel paradigme pour des interventions en orientation contribuant au développement d'un monde plus equitable au cours du 21ème siècle ?, AIOSP conference, Montpellier (2013)
- [20] 鶴見済：脱資本主義宣言ーグローバル経済が蝕む暮らし、新潮社 (2012)、130-205
- [21] 六辻彰二：アボカドは「悪魔の果実」か？ーブームがもたらす環境破壊と難民危機、
<https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/0db8cca5bbff8169623f3d01025c9132c4b11c24> (2021) (2024 年 12 月 1 日取得)
- [22] 春口徳雄：ロール・レタリング (役割交換書簡法) の理論と実際、杉田峰康 (監修) 春口徳雄 (編著)、チーム医療(1995)、12-18.
- [23] 中嶋渥、山本眞利子：「就職後の自分」を用いたロールレタリングが大学生の進路不決断と自尊感情に及ぼす影響、久留米大学心理学研究、6(2007)、75-80
- [24] 佐瀬竜一：ロールレタリングを用いた大学生を対象にしたキャリア教育の試み、常葉大学教育学部紀要、36 (2016)、201-212
- [25] 飛永佳代：青年期における肯定的未来の想像が自己評価に与える影響-未来の自分を対象とした役割往復書簡法による実験的検討-、九州共立大学研究紀要、vol.2 No.1、1-7
- [26] 鈴木寧々：内在化された重要な他者について表現することの効果-ロールレタリングを用いて-、九州大学心理学研究、20 (2019)、43-49
- [27] 岡本泰弘：キャリア発達を支援するプログラム開発、金沢星稜大学人間科学研究、3 (2020)、85-91
- [28] 金子周平：「重要な他者の焦点化」に関する技法と研究の比較検討ーロール・レタリング、内観療法を中心とした文献レビューからー (2006)：89-96.
- [29] 柴田絹代、眞崎直子、松原みゆき、吉賀聖典、服部智子、今田菜摘：自己の気づきを促すロールレタリングの教育効果-保健師教育課程に学ぶ学生の公衆衛生看護学実習の振り返りから、日本赤十字広島看護大学紀要、20 (2020)、1-11
- [30] 樋口耕一、中村康則、周景龍：動かして学ぶ! はじめてのテキストマイニングフリー・ソフトウェアを用いた自由記述の計量テキスト分析 KH Coder オフィシャルブック IIー、ナカニシヤ出版 (2022)